

# ルカに因る聖福音

第一章 一 我等の中に明に知られたる事、二 卽始より言の實見者及び役者たりし者が我等に傳へたる事に就きて、多くの者が手を擧げて傳記を作るに因り、三 尊憲なるフェオフィルよ、我も凡の事を始より審に推し原ね、次第を以て爾の爲に書さんことの思を起せり、四 爾が學びたる教の堅き基を知らん爲なり。五 イウデヤの王イロドの時、アワイヤの班に屬する司祭にザハリヤと名づくる者あり、其妻はアアロンの裔にして、名をエリサワエタと云ふ。六 二人ながら神の前に義なる者にして、主の一切の誠命禮儀を虧くるなく行へり。七 彼等に子なかりき、エリサワエタは妊まざる者たりし故なり、二人共に年已に老いたり。八 ザハリヤが其班の次に依りて、司祭の職を神の前に行ふに値りて、九 司祭の例に循ひ、籤を掣きて、主の殿に入りて、香を焚くを得たり。一〇 香を焚く時、衆民外に在りて禱れり。一一 主の天使ザハリヤに現れて、香壇の右に立てり。一二 ザハリヤ之を見て、驚き且懼れたり。一三 天使彼に謂へり、ザハリヤ懼るる勿れ、蓋爾の祈禱は聞かれたり、爾の妻エリサワエタ子を生まん、爾之をイオアンと名づけん。一四 爾には喜と樂とあらん、且多くの者は其生るるに因りて悦ばん。一五 蓋彼は主の前に大なる者とならん、酒と諸醪とを飲まず、其母の胎よりし

て聖神に充てられん。一六 彼はイスライリの諸子の多くの者を轉じて、主彼等の神に歸せしめん。一七 彼はイリヤの精神と能力とを以て主の前に行かん、父の心を子に、逆ふ者を義者の智慧に歸らしめて、備へられたる民を主に進めん爲なり。一八 ザハリヤ天使に謂へり、我何を以て之を知らん、蓋我老いたり、我が妻も年邁けり。一九 天使彼に答へて曰へり、我はガウリイル、神の前に立つ者なり、使を奉じて爾に告げ、爾に此の福音を爲す。二〇 視よ、爾瘡となり、言ふ能はずして、此の事の成る日に至らん、我が言を信ぜざりし故なり、是の言は時に及びて必應はん。二一 時に民はザハリヤを候ちて、其殿の内に久しく在るを奇めり。二三 遂に出でて彼等に言ふ能はざれば、乃其殿の内に異象を見しことを曉れり、彼は首を以て彼等に意を示し、而して瘡たりき。二三 其職事の日滿つるに及びて、家に歸れり。二四 此の日の後、其妻エリサワエタ妊みて、隠れ居りしこと五月にして曰へり、二五 主は斯く我に爲せり、彼は此の日に於て我を眷みて、我が耻を人人の間に洒がしめたり。二六 第六月に於て、天使ガウリイルは神より使を奉じて、ガリレヤの邑ナザレトと名づくる所に、二七 ダワイドの家の人、名はイオシフと云ふ者に聘せられたる處女に臨めり、處女の名はマリヤなり。二八 天使入りて、之に謂へり、恩寵を蒙れる者、慶べよ、主は爾と偕にす、爾は女の中に祝福せられたり。二九 女彼を見て、其言を訝り、此の問安は何事



蓋其民を眷みて、之に購を爲し、六九我等の爲に救の角を其僕  
ダワイドの家に興せり、七〇古世より其聖なる預言者の口を以て言ひ  
しが如し、七一 卽我等を我が諸敵及び凡そ我等を惡む者の手より救  
ひ、七二 以て矜恤を我が先祖に施し、其聖なる約、七三 卽我が祖ア  
ウラムに矢ひたる誓を記念せん、七四 謂ふ、我等に我が諸敵の手  
より救はれし後、七五 懼なく、彼の前に在りて、聖を以て、義を以  
て、生涯彼に事へしめんと。七六 子よ、爾も至上者の預言者と稱  
へられん、蓋主の面前に行きて、其道を備へ、七七 彼の民に、其救  
は卽諸罪の赦にして、我が神の矜恤に因ることを知らしめん。七八  
此の矜恤に因りて、東旭は上より我等に臨めり、七九 幽暗と死の蔭と  
に坐する者を照し、我等の足を平安の道に向はしめん爲なり。八〇 子  
は漸く成長し、精神益 强健にして、其イスライリに顯るる日に  
至るまで野に居りき。

第二章 一 彼の日ケサリ アウグストより 詔 出でて、天下の人を  
咸く籍に登らしむ。二 此の籍はキリニイのシリヤを治むるとき、初め  
て行はれし者なり。三 是に於て衆人籍に登らん爲に、各其邑に往  
けり。四 イオシフも又ダワイドの宗族と血統となるを以て、五 マリヤ  
其聘せられたる妻、己に孕める者と偕に、籍に登らん爲に、ガリレヤ  
の邑ナザレトより、イウデヤに、ダワイドの邑ワイフレエムと名づく

る處に往けり。六 彼等が彼處に在る時に、産日届れり。七 乃其冢子  
を生み、之を襁褓に裏みて、槽に置き、旅館には彼等の爲に居  
る所なかりし故なり。八 此の地に牧者あり、夜間野に於て其羊の群  
を守れり。九 視よ、主の天使彼等の前に立ち、主の光榮彼等を環り照  
せり、彼等大に懼れたり。一〇 天使彼等に謂へり、懼るる勿れ、蓋視  
よ、我爾等に大なる喜、萬民に及ぼんとする者を福音す、一一  
今日爾等の爲にダワイドの邑に於て、救主卽主ハリストス生れた  
り。一二 爾等襁褓に裏まれたる嬰兒の槽に臥せるを見ん、是れ  
其徴なり。一三 條 天使と偕に衆くの天軍あり、神を讚美して曰へ  
り、一四 至高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人には惠臨め  
り。一五 天使等が彼等を離れて天に升起し時、牧者互に言へり、ワ  
イフレエムに往きて、彼處に成りし事、主が我等に示し、所を見ん。  
一六 乃急ぎ來りて、マリヤとイオシフ及び槽に臥せる嬰兒を見  
たり。一七 既に見て、此の兒に關して彼等に告げられし事を語れり。  
一八 聞きし者皆牧者が語りし事を奇とせり。一九 惟マリヤは此等の言  
を悉く其心に藏めて、之を守れり。二〇 牧者は、凡そ彼等に告げ  
られし如く、聞きし事見し事の爲に、神を讚榮讚美して返れり。二一  
八日滿ちて、嬰兒に割禮を行ふべき時至りたれば、其名をイイスス  
と名づけたり、卽其未だ孕まれざる先に天使の名づけし所なり。  
二三 モイセイの律法に依りて、潔の日の滿つるに及び、嬰兒を攜へ

てイエルサリムに上れり、之を主に奉らん爲なり。二三 主の律法に録されしが如し、曰く、凡そ初めて胎を開く男子は主に聖なりと稱へらるべしと。二四 又主の律法に言ふ所に依りて、雙の斑鳩或は二二の雛鴿を祭に獻げん爲なり。二五 視よ、イエルサリムにシメオンと名づくる人あり、斯の人義にして敬虔なり、イスライリを慰むる者を俟ち、而して聖神彼に臨めり。二六 彼に、聖神に由りて、主のハリストスを見ざる先には、死を見ざらんと示されたり。二七 彼神に依りて殿に來れり、父母が嬰兒イイススを攜へて、之に律法の例を行はん爲に入りし時、二八 彼は嬰兒を其手に取り、神を祝讚して曰へり、二九 主幸よ、今爾の言に循ひて、爾の僕を釋し、安然として逝かむ。三〇 蓋我が目は爾の救を見たり、三一 爾が萬民の前に備へし者なり、三二 是れ異邦人を照す光、及び爾の民イスライリの榮なり、三三 イオシフ及び嬰兒の母は彼に關して言はるる事を奇とせり。三四 シメオン彼等を祝福して、其母マリヤに謂へり、視よ、此の子は置かれて、イスライリの中に衆くの者の類れ又は興るを致し、且駁論の號と爲らん、三五 衆くの心の念の露れん爲なり、爾にも劍は靈を貫かん。三六 又預言女アンナあり、アシルの支派ファヌイルの女なり、處女の時より夫と偕に居りしこと七載、年大に老いたり、三七 齡約八十四の嫠にして、殿を離れず、齋と祈禱とを以て晝夜奉事せし者なり。三八 彼も斯の時來り就きて、主を讚榮し、且此

の嬰兒の事を凡そイエルサリムに在りて贖を俟つ者に語れり。三九 既に主の律法に遵ひ、悉く之を竟へてガリレヤの故邑ナザレトに歸れり。四〇 子は漸く成長し、精神益強健にして、智慧充ち、神の恩寵は彼に臨めり。四一 其父母歳毎に逾越節筵にイエルサリムに往けり。四二 彼の十二歳になりし時、亦節筵の例に遵ひて、イエルサリムに上りしに、四三 日卒りて返る時、童子イイスス イエルサリムに留れり。イオシフと其母とは之を知らずして、四四 彼は同行者の中に在りと意へり、一日程を行きて、彼を親戚知己の間に尋ねしに、四五 遇はざりき、乃彼を尋ねてイエルサリムに返れり。四六 三日の後彼に殿に遇へるに、彼教師の中に坐して、且聽き、且問へり。四七 彼に聞く者皆其智慧と其應對とを奇とせり。四八 父母彼を見て駭けり、其母彼に謂へり、兒よ、何ぞ我等に斯く行ひたる、視よ、爾の父と我と憂ひて爾を尋ねたり。四九 彼曰へり、奚ぞ我を尋ねたる、豈我は我が父に屬する所に在るべきを知らずや。五〇 然れども彼等は其言ひし言を曉らざりき。五一 イイスス彼等と偕に下りて、ナザレトに來り、彼等に順ひ居りき。彼の母は此等の言を悉く其心に藏めたり。五二 イイススは智慧と齡と神及び人人の寵愛とに益進めり。

第三章 一 テイワエリイケサリ在位の十五年、ポンティイイピラト

イウデヤの方伯たり、イロドガリレヤの分封の君たり、其兄弟フィリップイトウレヤ及びトラホニダの地の分封の君たり、リサニイワイリニヤの分封の君たり、ニアンナ及びカイアファの司祭長たる時、神の言はザハリヤの子イオアンに野に臨めり。三彼はイオルダンの近傍を周く行きて、罪の赦の爲に悔改の洗禮を傳へたり、四預言者イサイヤの言の書に録せるが如し、云く、野に呼ぶ者の聲ありて云ふ、主の道を備へ、其徑を直くせよ、五凡の谷は填められ、凡の山と岡とは卑くせられ、曲れるは直くせられ、險しきは平にせられん、六而して凡の肉身は神の救を見んと。七イオアンは洗を受ける爲に來れる民に謂へり、蝮の類よ、誰か爾等の將來の怒を避くることを示したる、八然らば悔改に合ふ果を結べ、自ら意ひて、我等の父はアウラムなりと云ふ勿れ、蓋我爾等に語ぐ、神は此の石よりアウラムの爲に子を興すを能す。九既に斧も樹の根に置かる、凡そ善き果を結ばざる樹は、斫られて火に投げられん。一〇民彼に問ひて曰へり、然らば我等何を爲すべきか。一一彼答へて曰へり、二の衣を有てる者は有たざる者に與へよ、食を有てる者も然せよ。一二税吏も亦洗を受ける爲に來りて、彼に謂へり、師よ、我等何を爲すべきか。一三彼答へて曰へり、爾等に定められたる者より多く取る勿れ。一四軍士も亦彼に問ひて曰へり、我等何を爲すべきか。彼等に謂へり、人を刳す勿れ、誣ふる勿れ、爾等の俸給を以て足れりとせよ。一五民

が望を懷きて、皆其心に、イオアンを是れハリストスに非ずやと度りし時、一六イオアン衆に答へて曰へり、我水を以て爾等に洗を授く、然れども更に我より強き者は來る、我其屨の帶を解くにも堪へず、彼は聖神及び火を以て爾等に洗を授けん。一七其箕は其手に在り、彼は其禾場を淨めて、麥を其倉に斂め、糠を滅えざる火に燬かん。一八其他多くの事を教へて民に福音せり。一九分封の君イロド、其兄弟の妻イロデアダの爲、及び凡そイロドの行ひし惡の爲に、彼に責められて、二〇凡の事に又之を増せり、即イオアンを獄に閉せり。二一民皆洗を受けるとき、イイススも亦洗を受けて祈れるに、天開けて、二二聖神見ゆる形を以て、鴿の如く其上に降り、且天より聲ありて曰へり、爾は我の至愛の子、我爾を喜べり。二三イイスス其務を始むる時、年約三十なり。人彼を以てイオシフの子と爲せり。イオシフの父はイリイ、二四其父はマトファト、其父はレワイ、其父はメルヒ、其父はイアンナ、其父はイオシフ、二五其父はマツタフィ、其父はアモス、其父はナウム、其父はエスリム、其父はナゲイ、二六其父はマアフ、其父はマツタフィ、其父はセメイ、其父はイオシフ、其父はイウダ、二七其父はイオアンナ、其父はリサ、其父はゾロワエリ、其父はサラファイイリ、其父はニリ、二八其父はメルヒ、其父はアデイイ、其父はコサム、其父はエルモダム、其父はイル、二九其父はイオシイ、其父はエリエゼル、其父はイオリム、其父はマト

ファト、其父はレワイ、三〇 其父はシメオン、其父はイウダ、其父はイオシフ、其父はイオナン、其父はエリアキム、三一 其父はメラア、其父はマイナン、其父はマツタファ、其父はナファン、其父はダワイド、三二 其父はイエツセイ、其父はオワイド、其父はワオラズ、其父はサルモン、其父はナアツソン、三三 其父はアミナダフ、其父はアラム、其父はエスロム、其父はファレス、其父はイウダ、三四 其父はイアコフ、其父はイサク、其父はアウラアム、其父はファラ、其父はナホル、三五 其父はセルフ、其父はラガフ、其父はファレク、其父はエワエル、其父はサラ、三六 其父はカイナン、其父はアルファクサド、其父はシム、其父はノイ、其父はラメフ、三七 其父はマフサラ、其父はエノフ、其父はイアレド、其父はマレレイル、其父はカイナン、其父はエノス、其父はシフ、其父はアダム、其父は神なり。

**第四章** 一 イイスス聖神に満てられて、イオルダンより歸り、神に導かれて野に適き、二 四十日の間悪魔に試みられたり。此の諸日には一切食はざりき、其卒るに及びて遂に飢ゑたり。三 悪魔彼に謂へり、爾若し神の子ならば、此の石に命じて、餅と爲らしめよ。四 イイスス之に答へて曰へり、録せるあり、人は惟餅のみを以て生くべきに非ず、乃凡の神の言を以てす。五 悪魔彼を攜へて、高き山に登り、瞬の間に世界の萬國を示して、六 彼に謂へり、此等の一切の權威

と榮華とを爾に與へん、蓋此れ我に委ねられたり、我欲する者に之を與ふ。七 故に爾若し我を拜せば、悉く爾の有とならん。八 イイスス之に答へて曰へり、サタナ、我より退け、蓋録せるあり、主爾の神を拜せよ、獨彼のみに事へよと。九 又彼を攜へて、イエルサリムに至り、殿の頂に立たしめて、彼に謂へり、爾若し神の子ならば、自らはより下に投ぜよ、一〇 蓋録せるあり、爾の爲に其天使に命じて、爾を護らしめん、一一 彼等其手にて爾を抱へて、爾の足を石に躓かざらしめんと。一二 イイスス之に答へて曰へり、言へるあり、主爾の神を試みる勿れと。一三 悪魔は既に其誘試を盡して、暫く彼を離れたり。一四 イイスス神の能を満て、ガリレヤに歸れり、其聲名徧く四方に播れり。一五 彼其諸會堂に於て教を宣べ、衆人に讚榮せられたり。一六 彼は其養育せられし所のナザレトに來り、安息の日に、其常例に依りて、會堂に入り、讀まんと欲して起てり。一七 預言者イサイヤの書を彼に與ふるあり、彼は書を披きて、左に録せる所を出せり、云く、一八 主の神我に在り、蓋彼は我に膏して、貧しき者に福音せしめ、我を遣して、心の傷める者を醫し、擻者に釋を、瞽者に見ることを傳へ、壓せらるる者に自由を與へ、一九 主の禧 年を傳へしめたりと。二〇 乃書を掩ひ、役者に與へて坐せしに、會堂に在る者皆彼に目を注げり。二一 彼宣べ始めて曰へり、此の爾等が聴きし所の書は今應へり。二二 衆皆之を證し、

且其口より出づる恩寵の言を奇として曰へり、是れイオシフの子に非ずや。二三 イイスス彼等に謂へり、爾等必我に諺を引きて云はん、醫師よ、己を醫せ、我等が聞きし所、カペルナウムに行はれし事を、此に爾の故土にも行へと。二四 又曰へり、我誠に爾等に語ぐ、預言者は其故土に在りて納れらるる者あらず。二五 我眞實に爾等に語ぐ、イリヤの日に、三年六月天閉ぢて、大なる饑饉全地に至りし時、イズライリの中に多くの瘵ありたれども、二六 イリヤは其一人にも遣されざりき、唯シドンのサレプタにのみ、瘵なる婦に遣されたり。二七 又預言者エリセイの時、イズライリの中に多くの癩病者ありたれども、其一人も潔められざりき、唯シリヤの子エマンのみ潔められたり。二八 會堂に在る者此を聞きて、皆大に怒り、二九 起ちて彼を邑の外に逐ひ、曳きて其邑の建てられたる山の崖に至り、彼を推し下さんとせしに、三〇 彼は衆の中を過ぎて去れり。三一 ガリレヤの邑カペルナウムに來り、安息日に於て彼等を教へしに、三二人人其訓を奇とせり、其言に權ありし故なり。三三 會堂に汚鬼に憑らるる人あり、大聲に呼びて曰へり、三四 唉ナザレトのイイススよ、我等と爾と何ぞ與らん、爾は我等を滅さん爲に來りしか、我爾が誰なるを知る、乃神の聖なる者なり。三五 イイスス彼を禁めて曰へり、口を緘ちて、此の人より出でよ。魔鬼之を堂中に仆し、少しも之を傷はずして出でたり。三六 衆皆驚きて、相語りて曰へり、

是れ如何なる言ぞ、蓋彼權を以て、能を以て汚鬼に命じて、彼等出づ。三七 其聲聞徧く地の四方に揚れり。三八 彼會堂を出でて、シモンの家に入れり、シモンの岳母熱を病むこと甚し、人之が爲に彼に請へり。三九 彼其傍に立ちて、熱を禁められたれば、乃退けり、婦直に起きて彼等に供事せり。四〇 日の入る時、種種の病を患ふる者を有てる人、咸之を攜へて、彼に就きたるに、彼一手を其上に按せて、之を醫せり。四一 魔鬼も亦多くの人より出でて、呼びて曰へり、爾は神の子ハリストスなり。然るに彼は之に禁めて、其ハリストスたるを識ることを言ふを許さざりき。四二 朝に及びて、イイスス出でて、野の處に適けり、民彼を尋ね、彼に來りて、其彼等を離れ去らんことを止めたり。四三 然れども彼は之に謂へり、我他の邑にも神の國を福音す可し、蓋し我是が爲に遣されたり。四四 乃ガリレヤの諸會堂に於て教を宣べたり。

**第五章** 一 民が神の言を聽かん爲に、彼に擁し逼りし時、彼ゲンニサレトの湖の濱に立ちて、二 二の舟の湖に在るを見たり、漁者は舟を離れて網を洗へり。三 彼はシモンに屬する一の舟に登りて、少しく岸より離れんことを請ひ、坐して舟より民を教へたり。四 語り竟りて、シモンに謂へり、深き處に移り、網を下して、漁せよ。五 シモン對へて曰へり、夫子よ、我終夜勞して、得る所なかりき、然

れども爾の言に依りて、我網を下さん。六 既に之を行ひて、魚を圍めること甚多く、網裂くるに至れり。七 乃他の舟に在る侶を招ぎて、來り助けしむるに、彼等來りて、魚二の舟に切ちて、幾ど沈まんとせり。ハシモンペトル之を見て、イイススの膝下に伏して曰へり、主よ、我を離れよ、我罪人なればなり。九 蓋彼及び彼と偕に在りし者は、皆漁りたる魚の爲に甚驚けり、一〇 シモンの侶たりしゼウェデイの子イアコフ及びイオアンも亦然り。イイススシモンに謂へり、懼るる勿れ、今より後爾人を漁らん。一一 彼等舟を岸に曳き、一切を捨てて、彼に従へり。一二 イイスス一の邑に在りし時、全身癩病を患ふる人來り、イイススを見て、俯伏し、彼に求めて曰へり、主よ、爾若し望まば、我潔むるを能す。一三 彼手を伸べて、之に觸れて曰へり、我望む、潔まれ。癩病直に離れたり。一四 イイスス彼に戒めて言ふ、人に告ぐる勿れ、乃往きて、己を司祭に示せ、且爾の潔まりし爲に、モイセイの命ぜし如く獻じて、彼等に證を爲せ。一五 然れども其聲名益播り、衆くの民は教を聴き、又其諸病を醫されん爲に彼に集れり。一六 唯彼は退きて、野に適きて禱れり。一七 一日彼教を宣べしに、ファリセイ等と教法師等と、ガリレヤの諸郷、イウデヤ、及びイエリサルムより來りし者は坐し、主の能は病者を醫すことに於て顯れたり。一八 視よ、人人癩瘋の者を牀に載せて、昇き來り、之を家に入れて、イイススの前に置かんと欲したれ

ども、一九 人の衆きに因りて、昇き入るる所を得ざれば、屋上に升り、瓦の間より、彼を牀のまゝに縋り下して、中にイイススの前に置けり。二〇 イイスス彼等の信を見て、其人に謂へり、人よ、爾の罪は爾に赦さる。二一 學士等及びファリセイ等竊に議して曰へり、此の褻瀆を言ふ者は誰ぞ、獨神より外に、誰が罪を赦すを得ん。二二 イイスス彼等の意を知りて、彼等に答へて曰へり、爾等何ぞ心の中に議する、二三 爾の罪は爾に赦さると言ひ、或は起きて行けと言ふは、孰か易き、二四 然れども爾等が人の子の地に在りて罪を赦す權あることを知らん爲、(癩瘋の者に向ひて曰へり)、爾に謂ふ、起きて、爾の牀を取りて、爾の家に往け。二五 彼直に彼等の前に置き、臥し居たる牀を取り、神を讚榮して、其家に往けり。二六 衆皆駭きて、神を讚榮し、且大に懼れて曰へり、我等今日奇異なることを見たり。二七 斯の後イイスス出でて、税吏、名はレワイイと曰ふ者の、税關に坐せるを見て、之に謂へり、我に従へ。二八 彼一切を捨て、起ちて、彼に従へり。二九 レワイイ其家に於て彼の爲に大なる筵を設けしに、諸税吏及び他の者は多く彼等と與に席坐せり。三〇 學士等とファリセイ等とは怨言して、彼の門徒に謂へり、爾等は何ぞ税吏及び罪人と與に食飲する。三一 イイスス彼に答へて曰へり、康強なる者は醫師を需めず、乃病を負ふ者は之を需む。三二 我が來りしは、義人を召す爲に非ず、乃罪人を召して悔改せしめん爲なり。



三三 彼等イイススに謂へり、イオアンの門徒は屢齋して祈禱を爲す、フアリセイ等の門徒も亦然り、惟爾の門徒が食飲するは何ぞや。三四 彼は之に謂へり、爾等は婚筵の客に新娶者の尚彼等と偕に在る時、豈齋せしむるを得んや。三五 然れども新娶者の彼等より取らるる日至らん、其日には齋せん。三六 又譬を設けて彼等に謂へり、新しき衣の布を取りて、舊き衣を補ふ者あらず、然らずば新しき衣をも裂き、且新しき者より取りたる布は舊き者と合はざらん。三七 又新しき酒を舊き革囊に盛る者あらず、然らずば新しき酒は囊を敗りて、酒漏れ、囊も亡びん。三八 乃新しき酒は新しき囊に盛るべし、然らば兩者存せん。三九 又舊き酒を飲みて、直に新しきを欲する者あらず、蓋曰ふ、舊きは更に善し。

第六章 一 逾越節の二日の後の首の安息日に、イイスス禾田を過ぎ行けることあり、彼の門徒穂を摘み、手に埒みて食へり。二 或フアリセイ等彼等に謂へり、爾等何ぞ安息日に行ふべからざることを行ふ。三 イイスス之に答へて曰へり、爾等はダワイドが、己及び其從者の飢ゑし時、行ひし事、四 卽如何にして彼は神の家に入りて、司祭等の外何人も食ふべからざる供前の餅を取りて食ひ、且之を其從者に與へしを讀まざりしか。五 又彼等に謂へり、人の子は亦安息日の主なり。六 他の安息日に彼會堂に入りて、教ふることありしに、

彼處に右の手の枯へたる人ありき。七 學士等とフアリセイ等とは、彼が安息日に於て、斯の人を醫すや否やを窺へり、彼を罪する間を得ん爲なり。八 彼は其意を知りて、手の枯へたる人に謂へり、起きて、中に立て、彼起きて立てり。九 イイスス彼等に謂へり、我爾等に問はん安息日には善を行ひ、或は悪を行ふ、生命を救ひ、或は之を滅す、孰か宜しき、彼等黙然たり。一〇 遂に衆人を環視して、斯の人に謂へり、爾の手を伸べよ、彼斯く爲したれば、其手は健になりしこと他の手の如し。一一 彼等狂ひ怒りて、互に何をイイススに爲さんと議れり。一二 當日彼は祈禱の爲に山に登りて、終夜神に禱れり。一三 夜の明くるに及びて、其門徒を召し、彼等の中より十二人を選びて、之を使徒と名づけたり。一四 卽シモン、名をペトルと命ぜし者、及び其兄弟アンドレイ、イアコフ及びイオアン、フィリッブ及びワルフオロメイ、一五 マトフェイ及びフォマ、アルフェイの子イアコフ及びシオン、稱してジロトと云ふ者、一六 イアコフの兄弟イウダ及びイウダ「イスカリオト」、卽後に彼を賣りし者なり。一七 イイスス彼等と偕に下りて平地に立てり、爰に其衆くの門徒、及び衆くの民、イウダヤの四方イエルサリム并にテイルとシドンとの海濱よりして、一八 彼に聽かん爲、且己の病の醫されん爲に來りし者、又汚鬼を患ふる者ありき、彼等醫されたり。一九 衆民彼に捫らんと欲せり、蓋能彼より出でて、衆を醫せり。二〇 彼は目を擧げて、其門徒

を視て日へり、神の貧しき者は福まり、神の國は爾等の有なればなり。二 今飢うる者は福なり、爾等飽くを得んとすればなり。今泣く者は福なり、爾等笑ふを得んとすればなり。三人の子の爲に人人爾等を憎み、爾等を絶ち、且詬り、爾等の名を惡しき者として棄つる時は、爾等福なり、二三 其日に喜び樂めよ、天には爾等の賞多ければなり、蓋彼等の先祖は是くの如く預言者に行へり。二四 然るに爾等富める者は禍なる哉、爾等既に慰を得たればなり。二五 今飽きたる者は禍なる哉、爾等飢ゑんとすればなり。二六 人皆今笑ふ者は禍なる哉、爾等哀み哭かんとすればなり。二七 人皆爾等の事を善く言はん時は、爾等禍なる哉、蓋彼等の先祖は是くの如く偽預言者に行へり。二八 我爾等聽く者に語ぐ、爾等の敵を愛し、爾等を憎む者に善を爲し、二九 爾等を詛ふ者を祝福し、爾等を虐ぐる者の爲に禱れ。三〇 爾の頬を批つ者には、他の頬をも向けよ、爾の外服を奪う者には、裏衣をも取ることを拒む勿れ。三一 凡そ爾に求むる者には與へ、爾の物を取る者は、復之を促す勿れ。三二 二人の爾等に行はんを欲する事は、爾等も是くの如く之を人に行へ。三三 爾等若し爾等を愛する者を愛せば、爾等に何の感謝かあらん、蓋罪人等も彼等を愛する者を愛す。三三 若し爾等に善を行ふ者に善を行はゞ、爾等に何の感謝かあらん、蓋罪人等も是くの如き事を行ふ。三四 若し返さるる望ある者に借さば、爾等に何

の感謝かあらん、蓋罪人等も數の如く返されん爲に罪人等に借すなり。三五 然れども爾等敵を愛し、何を望まずして善を行ひ、又借し與へよ、則 爾等の賞は多からん、爾等至上者の子と爲らん、蓋彼は恩に負く者及び惡しき者に慈愛を施す。三六 故に爾等慈憐なること、爾等の父の慈憐なるが如くなれ。三七 人を議する勿れ、然らば議せられざらん、人を罪する勿れ、然らば罪せられざらん、人を恕せ、然らば爾等恕されん。三八 人に與へよ、然らば爾等に與へられん、嘉き量を以て、押し容れ、揺すり容れ、充ち溢れしめて、爾等の懷に納れられん、蓋何の量を以てか人に量らば、之を以て爾等にも量られん。三九 又彼等に譬を言へり、譬は譬を導くを得るか、二人ながら坑に陥らざらんや。四〇 門徒は其師の上に在らず、凡そ全備したる者も其師の如くならん。四一 爾何ぞ兄弟の目に物屑の在るを視て、己の目に梁木の在るを覺えざる、四二 或は己の目に梁木の在るを視ずして、如何ぞ爾の兄弟に告げて、兄弟よ、我に爾の目に在る物屑を出すを容せと曰ふを得ん、偽善者よ、先づ梁木を己の目より出せ、其時如何に兄弟の目より物屑を出すべきを見ん。四三 善き樹には惡しき果を結ぶ者なく、又惡しき樹には善き果を結ぶ者なし。四四 凡の樹は其果に由りて識らる、蓋荆棘よりは無花果を摘まず、又蒺藜よりは葡萄を採らず。四五 善き人は其心の善き寶庫より善き者を出し、惡しき人は其心の惡しき寶庫より惡しき者を出す、蓋

心に充つる者は口に言ふなり。四六 爾等何ぞ我を主よ、主よ、と稱へ、而して我が言ふ所を行はざる。四七 凡そ我に來り、我が言を聞きて、之を行ふ者は、我其何人に似たるを爾等に示さん。四八 彼は、家を建つるに、掘り且つ深くし、基を磬の上に置きたる人に似たり、洪水の有りし時、横流は其家を衝きたれども、之を動かす能はざりき、磬の上に基づけたればなり。四九 聞きて行はざる者は、家を土の上に基なくして建てたる人に似たり、横流の之を衝きし時、直に倒れたり、且其家の頽壞は大なりき。

第七章 一 彼は悉く其言を民に聽かしめ畢りて、カペルナウムに入れり。二 或百夫長、其愛する僕病みて死せんとせしに、三 イイスの事を聞きて、イウデヤの長老等を彼に遣し、來りて其僕を醫さんことを請へり。四 彼等イイスに來たりて、切に彼に求めて曰へり、爾此の人の爲に此を爲すは宜しきなり、五 蓋彼は我が民を愛し、我等の爲に會堂を建てたり。六 イイス彼等と偕に往きて、既に其家に遠からざる時、百夫長、友を遣して、彼に謂へり、主よ、勞する勿れ、蓋爾が私の舎に入るは當らず。七 故に我亦己を以て爾に就くに堪へずとせり、乃一言を出せ、然らば我が僕愈えん。八 蓋我人の權に屬すれども、我が下に兵卒ありて、我此に往くと云へば往き、彼に來れと云へば來り、我が僕に是を行へと云へば行ふ。九 イ

イスス之を聞きて、彼を奇として、顧みて、從へる民に謂へり、我爾等に語ぐ、イスライリの中にも我是くの如き信を見ざりき。一〇 遣されし者家に歸りて病める僕の己に愈されしを見たり。一一 其後 イイススナインと名づくる邑に往けるに、其門徒の多人及び衆くの民は彼と偕に行けり。一二 邑の門に近づきし時、彼處に死者の昇き出ざるあり、母の獨の子にして、其母は嫠なり、邑の民多く彼と偕にせり。一三 主彼を見て、憫みて、彼に謂へり、哭く勿れ。一四 乃近づきて、襁に觸れたれば、昇く者止れり、彼曰へり、少者よ、爾に謂ふ、起きよ。一五 死者起きて坐し、且言へり、イイスス之を其母に與へたり。一六 衆皆懼れて、神を讚榮して曰へり、大なる預言者は我等の中に興れり、神は其民を眷みたり。一七 彼に於ける此の聲聞はイウデヤの全國及び其四方に揚れり。一八 イオアンの門徒は悉く此等の事を彼に告げたれば、一九 イオアン其門徒の二人を召し、イイスに遣して曰へり、來るべき者は爾なるか、抑我等他の者を俟つべきか。二〇 彼等イイスに來りて曰へり、授洗イオアン我等を爾に遣して云く、來るべき者は爾なるか、抑我等他の者を俟つべきかと。二一 斯の時彼は多くの者を諸の疾、病及び惡鬼より醫し、又多くの醫者に見ることを賜へり。二二 イイスス彼等に曰へり、往きて、見し所聞きし所をイオアンに告げよ、即醫者は明き、跛者は歩み、癩者は潔まり、聾者は聽き、死者は起き、貧者は福音す。二三 凡

そ我の爲に惑はざる者は福なり。二四 イオアンの使者が去りし後、イイスス イオアンの事を擧げて民に謂へり、爾等何を觀んとして野に出でしか、風に動かさるる葦か、二五 抑何を觀んとして出でしか、柔き衣を衣たる人か、視よ、錦を衣て奢れる者は王の宮に在り。二六 然らば何を觀んとして出でしか、預言者か、然り、我爾等に語ぐ、彼は預言者より大なり。二七 彼は 即 夫の録して、視よ、我我が使を爾の面前に遣し爾に先だちて、爾の道を備へしめんと、曰はれたる者なり。二八 蓋我爾等に語ぐ、婦の生みし者の中、授洗イオアンより大なる預言者は有らず、然れども神の國に於て至と小き者は彼より大なり。二九 彼に聞きし衆民及び税吏等はイオアンの洗禮を受けて、神の義を稱せり。三〇 然れどもファリセイ等及び律法師等は彼より洗禮を受けずして、彼等に於ける神の旨を拒みたり。三一 主又曰へり、然らば我此の世の人人を誰に譬へん、彼等は誰に似たるか、三二 彼等は、童子、街に坐して、相呼びて、我等は爾等に龠を吹きたれども、爾等踊らざりき、爾等に 悲の歌を謡ひたれども、爾等哭かざりきと云ふ者に似たり。三三 蓋授洗イオアン來りて、餅を食はず、酒を飲まず 爾等云ふ、彼魔鬼に憑らると。三四 人の子來りて、食ひ飲む、又言ふ、視よ、是れ食を嗜み、酒を好む者、税吏及び罪人の友なりと。三五 唯睿智の子は皆睿智の義を明にせり。三六 ファリセイ等の一人彼に共に食せんことを請ひたれば、彼はファリ

セイの家に入りて席坐せり。三七 時に其邑の婦にして罪ある者、彼がファリセイの家に入りて席坐するを知りて、香膏を盛れる玉の盒を攜へ來り、三八 其後に足の下に立ち、哭きて、涙を以て其足を濡し、己の首の髪を以て之を拭ひ、其足に接吻して、之に香膏を抹れり。三九 彼を招きたるファリセイは此を見て、己の中に謂へり、此の人若し預言者たらば、彼に捫る者の孰たり、如何なる婦たるかを知らん、蓋是れ罪女なり。四〇 イイスス彼に答へて曰へり、シモンよ、我爾に言ふべき事あり。彼曰く、師よ、之を言へ。四一 イイスス曰へり、或債主に二人の負債者ありて、一人は銀五百枚、一人は五十枚を負へり、四二 其償ふ能はざるに因りて、彼は二人に免せり、然らば二人の中彼を愛すること孰か多からん、試みに言へ。四三 シモン對へて曰へり、意ふに、多く免されし者ならん。彼は之に謂へり、爾が議りしこと正し。四四 是に於て婦を顧みて、シモンに謂へり、爾此の婦を見るか、我爾の家に入りしに、爾は我が足の爲に水を給へざりき、然るに彼は涙を以て我が足を濡し、首の髪を以て之を拭へり。四五 爾は我に接吻せざりき、然るに彼は、我が此に入りし時より、我が足に接吻して已めず。四六 爾は我が首に油を抹らざりき、然るに彼は香膏を我が足に抹れり。四七 是の故に我爾に語ぐ、彼の多くの罪は赦さる、蓋彼多く愛せり、然れども少く赦さる者は、少く愛するなり。四八 乃 婦に謂へり、爾の罪は赦さる。

四九 彼と共に席坐せる者己の中に言へり、此れ何人にして罪をも赦すか。五〇 彼婦に謂へり、爾の信は爾を救へり、安然として往け。

第八章 一 厥後彼は諸の邑及び村を巡りて、教を宣べ、神の國を福音せり、彼と偕に十二徒あり、二 亦曾て悪鬼及び諸病より痊されたる數人の婦あり、即七の魔鬼の出でたるマリヤ、稱して「マダリナ」と云ふ者、三 又イロドの家宰フザの妻イオアンナ、又サンナ、及び其他多くの婦、其所有を以て彼に事へし者なり。四 衆くの民諸の邑より集りて、彼に就きたれば、彼を設けて曰へり、五 播く者は其種を播かん爲に出でたり、播く時路の旁に遺ちし者あり、乃踐まれたり、又天空の鳥之を啄めり。六 石の上に遺ちし者あり、萌え出でて稿れたり、潤澤なきが故なり。七 棘の中に遺ちし者あり、棘共に長びて、之を蔽へり。八 沃壤に遺ちし者あり、萌え出でて、實を結ぶこと百倍せり。之を言ひて呼べり、耳ありて聽くを得る者は聽くべし。九 其門徒彼に問ひて曰へり、此の譬は何ぞ。一〇 彼曰へり、爾等には神の國の奧義を知ること與へられたれども、他の者には譬を用ふる、彼等視れども見ず、聽けども悟らざる爲なり。一一 此の譬の義は左の如し、種は神の言なり。一二 路の旁の者は、是れ聽けども、後惡魔來りて、其心より言を奪ふ、彼等が信じて救はれざらん爲なり。一三 石の上の者は、是れ聽く時喜びて言を受く

れども、己に根なくして暫く信じ、誘惑の時に背く。一四 棘の中に遺ちし者は、是れ聽きて去り、而して度生の慮を貨財と宴樂とに蔽はれて、實を結ばず。一五 沃壤に遺ちし者は、是れ言を聽きて、清潔良善なる心に之を守り、忍耐して實を結ぶ。(之を言ひて呼べり、耳ありて聽くを得る者は聽くべし。)一六 燈を燃し、而して器を以て之を覆ひ、或は牀の下に置く者あらず、乃燈臺の上に置く、入る者が光を見ん爲なり。一七 蓋隠れて顯れざる者なく、藏して知られず、且露ならざる者なし。一八 故に爾等聽くことの如何を慎め、蓋有てる者は之に與へられ、有たらざる者は、其有てると意ふ物も、之より奪はれん。一九 時に彼の母及び兄弟彼に來りしに、群衆の爲に近づくを得ざりき。二〇 或彼に告げて曰へり、爾の母及び爾の兄弟外に立ちて、爾を見んと欲す。二一 彼は之に答へて曰へり、我が母及び我が兄弟とは、神の言を聽きて行ふ者はなり。二二 一日彼は門徒と偕に舟に登りて、彼等に謂へり、我等湖の彼岸に濟るべし、乃行けり。二三 行く時彼寝ねたり。颶風湖に吹き下し、水舟に満たんとして、危きこと甚し。二四 門徒就きて彼を醒まして曰へり、夫子、夫子、我等亡ぶ。彼起きて、風と水の浪とを禁めたれば、則止みて、穩になれり。二五 彼等に謂へり、爾等の信は安に在るか。彼等懼れ驚きて、互に言へり、是れ何人ぞ、風にも水にも命じて、亦彼に順ふ。二六 ガリレヤに對へるガダラの地

に著きて、二七 彼が岸に登りし時、邑の一人の者彼に迎へたり、乃久しく魔鬼に憑られ、衣を衣らず、家に住まずして、墓に住める者なり。二八 此のイイススを見て號び、彼の前に俯伏し、大なる聲を以て曰へり、至上なる神の子イイススよ、我と爾と何ぞ與らん、爾に求む、我を苦しむる勿れ。二九 蓋イイススは汚鬼に此の人より出づるを命じたり、其彼を拘へしこと久しければなり。彼を守りて、鐵索と桎梏とに繋ぎたれども、彼繋を斷ちて、魔鬼の爲に野に逐はれたり。三〇 イイスス彼に問ひて曰へり、爾の名は何ぞ、彼曰へり、大隊、多くの魔鬼彼に入りたればなり。三一 魔鬼はイイススに、彼等に淵に往くを命ぜざらんことを求めたり。三二 彼處に豕の大群の山に牧はれたるあり、魔鬼は彼に、其中に入るを許さんことを求めたれば彼之を許せり。三三 魔鬼人より出でて、豕に入りしに、群は山坡より湖に逸けて溺れたり。三四 牧ふ者有りし事を觀て、奔り往きて、邑及び諸村に告げたれば、三五 人人有りし所を觀ん爲に出で、イイススに來り、魔鬼の出でたる人が衣を着、心慥にして、イイススの足下に坐せるを見て、懼れたり。三六 見し者は魔鬼に憑られたる人の如何に愈されしを告げたれば、三七 ガダラ地方の民は、皆イイススに彼等を離れんことを請へり、大に懼れし故なり。彼舟に登りて返れり。三八 魔鬼の出でたる人は彼と偕に居らんことを求めたれども、イイスス之を去らしめて曰へり、三九 爾の家に歸りて、神が爾に如何なる事を行

ひしを告げよ。彼往きて、全邑にイイススが彼に如何なる事を行ひしを宣べたり。四〇 イイススが返りし時、民彼を接したり、皆彼を俟ちたればなり。四一 視よ、イアイルと名づくる人にして、會堂の宰たる者、來りてイイススの足下に俯伏し、其家に入らんことを求めたり、四二 蓋彼に獨の女、年約十二の者ありて、今死せんとせり。彼が行く時、民之に擁し逼れり。四三 十二年血漏を患ふる婦、醫師の爲に其悉くの所有を費したれども、一人にも痊ざるを得ざりし者は、四四 後より就きて、彼の衣の裾に捫りしに、其血漏直に止れり。四五 イイスス曰へり、誰か我に捫りたる。衆の認めざる時、ペトル及び彼と偕に有りし者曰へり、夫子、民爾が繞りて擁し逼るに、爾は誰か我に捫りたると謂ふか。四六 然れどもイイスス曰へり、我に捫りし者あり、蓋我能の我より出でしを覺えたり。四七 婦は自ら隠す能はざるを見て、戰きて來り、彼の前に俯伏して、彼に捫りし故、又如何にして、立に愈されしを、彼に衆民の前に告げたり。四八 彼は之に謂へり、女よ、心を安ぜよ、爾の信は爾を救へり、安然として往け。四九 彼が尚言ふ時、會堂の宰の家より人來りて曰く、爾の女已に死せり、師を煩はす勿れ。五〇 イイスス之を聞きて、宰に答へて曰へり、懼るる勿れ、惟信ぜよ、彼は救はれん。五一 家に來りて、ペトル、イオアン、イアコフ、及び小女の父母の外、誰にも入ることを許さざりき。五二 衆人爲に哭き哀めるに、彼曰へり、

哭く勿れ、彼は死せしに非ず、乃寝ぬるなり。五三 人人其死せしを知りて、彼を晒へり。五四 彼衆を外に出して、其手を執りて、呼びて曰へり、小女、起きよ。五五 其神返りて、直に起きたり、彼は之に食を與へんことを命ぜり。五六 其父母駭きて、イイスス彼等に戒めて、行はれし事を人に告ぐる勿らしめたり。

第九章 一 イイスス十二徒を召し集めて、彼等に凡の魔鬼を制し、又諸病を醫す能と權とを與へ、二 彼等を神の國を傳へ、亦病者を醫さん爲に遣し、三 且彼等に謂へり、旅の爲に杖をも、囊をも、糧をも、銀をも、一切取る勿れ、二の衣をも攜ふる勿れ。四 何の家に入るとも、彼處に留りて、亦彼處より途に出でよ。五 若し爾等を接ける者あらば、其邑を出づる時、爾等の足の塵をも拂へ、彼等に對する證を爲さん爲なり。六 彼等出でて、鄉村を歩き、遍く福音を宣べ、醫を施せり。七分封の君イロド、凡そイイススの行ひし事を聞きて、惑へり、蓋或者は是をイオアンの死より復活せしなりと言ひ、八 他の者はイリヤの現れしなりと言ひ、又他の者は古の預言者の一人の復活せしなりと云へり。九 イロド曰へり、イオアンは、我已に其首を斬れり、今我が是くの如き事を聞くは、斯れ何人ぞ、乃彼を見んと欲せり。一〇 使徒等歸りて、其行ひし事を以てイイススに告げたり、彼は之を攜へて、潜にワイフサイダと名づくる邑に近き野

の處に退けり。一一 民之を知りて、彼に隨ひしに、彼は之を接けて、神の國の事を語り、且醫を需むる者を醫せり。一二 日の昃く時、十二徒彼に就きて曰へり、民を去らしめよ、彼等が四周の鄉村に往きて、宿を取り、食を覓めん爲なり、蓋我等は此に野の處に在るなり。一三 然れども彼曰へり、爾等之に食を與へよ。彼等曰へり、若し往きて、此の衆民の爲に食を市はずば、我等には五の餅と二の魚との外に有るなし。一四 蓋其人約五千ありき。彼其門徒に謂へり、彼等を五十づゝ並び坐せしめよ。一五 是くの如く行ひて、衆人を坐せしめたり。一六 彼は五の餅と二の魚とを取りて、天を仰ぎて之を祝福し、之を擘き、門徒に與へて、民の前に陳ねしめたり。一七 皆食ひて飽き、其餘りたる屑十二筐を拾へり。一八 イイスス獨處に於て祈禱することありしに、門徒彼と偕にせり。彼は之に問ひて曰へり、民我を言ひて誰とか爲す。一九 彼等答へて曰へり、授洗イオアンと爲し、他の者はイリヤと爲し、又他の者は古の預言者の一人復活したりと爲す。二〇 彼は之に謂へり、爾等は我を言ひて誰とか爲す。ペトル答へて曰へり、神のハリストスと爲す。二一 イイスス彼等に戒めて、此の事を人に告ぐる勿からんことを命じたり。二三 又曰へり、人の子は多くの苦を受け、長老等と司祭諸長と學士等とに棄てられ、且殺されて、第三日に復活すべし。二三 又衆に謂へり、人若し我に従はんと欲せば、己を捨て、日日其十字架を負ひて、我に従へ。

二四 蓋己の生命を救はんと欲する者は、之を喪はん、我の爲に己の生命を喪はん者は、之を救はん。二五 蓋人全世界を獲とも、己を喪ひ、或は損なはず、何の益かあらん。二六 蓋我及び我の言を耻ぢん者は、人の子は、己の父と聖なる天使等との光榮を以て來らん時、彼を耻ぢん。二七 我誠に爾等に語り、此に立てる者の中には、未だ死を嘗めずして、神の國を見んとする者あり。二八 此等の言の後約八日を越えて、彼はペトル、イオアン、イアコフを攜へ、山に登りて禱れり。二九 禱る時其面の容は變り、其衣は皎くして輝けり。三〇 視よ、二人の彼と語れるあり、即モイセイ及びイリヤなり、三一 光榮の中に現れて、彼がイエルサリムに成すべき逝世の事を言へり。三二 ペトル及び之と偕に有りし者は倦みて寝ねたり、既に寤めて、イイススの光榮、及び二人の彼と偕に立てるを見たり。三三 其彼を離るる時、ペトル イイススに謂へり、夫子よ、我等此に居るは善し、我等三の廬を建て、一は爾の爲、一はモイセイの爲、一はイリヤの爲にせん、自ら言ふ所を知らざりき。三四 彼が尚之を言ふ時、雲ありて彼等を蓋へり、雲に入りし時、懼れたり。三五 雲より聲ありて云ふ、此は我の至愛の子なり、彼に聽け。三六 聲已に發して、イイススの獨在るを見たり。彼等黙して、當時には見し事を誰にも告げざりき。三七 翌日彼等が山より下りし時、衆くの民は彼を迎へたり。三八 視よ、民の中の一人呼びて曰へり、師よ、爾に求む、我が子

を眷みよ、此れ我が獨子なり。三九 惡鬼彼を執ふれば、彼忽叫び、彼を拘擥させ、沫を噴かしめ、彼を傷ひて、漸く離る。四〇 我爾の門徒に之を逐ひ出さんことを求めたれども、彼等能はざりき。四一 イイスス答へて曰へり、噫信なき悖れる世や、我何時までか爾等と偕にし、爾等を忍ばん、爾の子を此に攜へ來れ。四二 彼が來る時、魔鬼彼を倒して、拘擥させたり、イイスス汚鬼を禁め、子を醫して、其父に與へたり。四三 衆皆神の大能を奇とせり。衆が凡そイイススの行ひし事を奇とする時、彼其門徒に謂へり、四四 爾等此の言を己の耳に藏めよ、人の子は人人の手に付されん。四五 然れども彼等は此の言を曉らざりき、此れ彼等の爲に掩はれて、其之に達せざるを致せり、而して此の言を彼に問ふことを懼れたり。四六 時に彼等に念は起れり、彼等の中孰か大なると。四七 イイスス其心の念を觀て、幼兒を取り、之を己の側に立て、四八 彼等に謂へり、我が名に因りて此の幼兒を接けん者は、我を接くるなり、我を接けん者は我に遣し、者を接くるなり、蓋爾等衆の中に最 小き者は、是れ大なる者なり。四九 イオアン答へて曰へり、夫子よ、我等は爾の名を以て魔鬼を逐ひ出す人を見て、之に禁じたり、其我等に従はざる故なり。五〇 イイスス之に謂へり、禁ずる勿れ、蓋爾等に敵せざる者は爾等の與屬なり。五一 彼が世より擧げらるる日の近づきし時、彼イエルサリムに面して行かんことを定めたり。五二 使を其面前に遣



しゝに、彼等往きて、サマリヤの郷に入り、彼が爲に備へんとしたれども、五三 彼處には彼を納れざりき、其イエルサリムに面して往くが故なり。五四 其門徒イアコフ及びイオアン之を見て謂へり、主よ、爾は我等がイリヤの爲しゝ如く、火の天より降りて、彼等を滅さんことを命ずるを欲するか。五五 イイスス顧みて、彼等を戒めて曰へり、爾等は自ら如何なる神に屬するを知らず。五六 蓋人の子の來りしは、人人の靈を滅さん爲に非ず、乃之を救はん爲なり。遂に他の郷に往けり。五七 彼等が道を行く時、或彼に謂へり、主よ、爾何處に往くとも、我爾に従はん。五八 イイスス之に謂へり、狐には穴あり、天空の鳥には巢あり、惟人の子には首を枕する處なし。五九 又他の者に謂へり、我に従へ。彼曰へり、主よ、我に先づ往きて、我が父を葬るを容せ。六〇 然れどもイイスス之に謂へり、死者に其死者を葬るを任せよ、爾は往きて、神の國を傳へよ。六一 又他の者曰へり、主よ我爾に従はん、但先づ往きて吾が家の者に別を告ぐるを容せ。六二 イイスス之に謂へり、手を犁に著けて、後を顧みる者は、神の國に當らざるなり。

第十章 一 厥後主は又別に七十門徒を選び、彼等各二人を己に先だてゝ、自ら往かんと欲する所の諸邑諸處に遣し、二彼等に謂へり、穡は多く、工は少し、故に穡主に、工を其穡所

に遣さんことを求めよ。三 往け、我が爾等を遣すは、羔を狼の中に入るが如し。四 金囊をも、行囊をも、屨をも、攜ふる勿れ、途中にて人に安を問ふ勿れ。五人の家に入る時は、先づ此の家に平安と曰へ。六 若し彼處に平安の子あらば、爾等の平安は彼に留らん、然らずば、爾等に歸らん。七 其家に居りて、彼等に在る所の者を食飲せよ、蓋勞する者の其値を得るは宜しきなり、家より家に移る勿れ。八 何の邑に入るとも、人爾等を接げば、其爾等の前に供ふる者を食へ。九 其中に在る病者を醫せ、又衆に告げて曰へ、神の國は爾等に近づけりと。一〇 何の邑に入るとも、人爾等を接げずば、其嚮に出でて曰へ、一一 爾等の邑より我等に著きたる塵をも、我等は爾等に對ひて拂ふ、然れども之を知れ、神の國は爾等に近づけりと。一二 我爾等に語ぐ、彼の日に於てソドムは斯の邑より忍び易からん。一三 禍なる哉爾ホラジンよ、禍なる哉爾ワイフサイダよ、蓋爾等の中に行はれし異能は、若しテイル及びシドンに行はれしならば、彼等は早く麻を衣、灰を蒙り、坐して悔改せしならん。一四 然らば審判に於てテイル及びシドンは爾等より忍び易からん。一五 天にまで擧げられしカペルナウムよ、爾も地獄にまで落とされん。一六 爾等に聽く者は我に聽く、爾等を拒む者は我を拒む、我を拒む者は我を遣しゝ者を拒むなり。一七 七十門徒喜びて返りて曰へり、主よ、爾の名に因りて魔鬼も我等に服す。一八 彼は之に謂へり、我

サタナいのちの電てんの如ごとく天てんより隕おちしを見たり。一九 視みよ、我われ爾なんぢ等に蛇へび、  
嘯ささり、及びおよび悉ことごとくの敵てきの能ちからを踐ふむ權けんを與あたふ、一も爾なんぢ等を害がいせざらん。  
二〇 然しかれども惡鬼あくきの爾なんぢ等に服ふくするを喜よろこぶと爲なす勿なかれ、乃すなはち爾なんぢ等の名な  
の天てんに録ときされしを喜よろこぶと爲なせ。二一 當時そのときイイスス神かみを以もつて喜よろこびて曰い  
へり、父ちち、天地てんちの主しゆよ、我われ爾なんぢを讚さん榮えいす、爾なんぢ此これ等を智ち者しや及び達たつ者に隱かく  
して、之これを赤せき子しに顯あらはしゝに因よる、父ちちよ、然しかり、蓋けだしはくの如ごときは爾なんぢ  
の旨むねに嘉よみせし所ところなり。二三 門徒もんたを顧かへりて曰いへり、萬物ばんぶつは我わが父ちちより  
我われに授さづけられたり、父ちちの外ほかに、子この誰たれたるを識しる者ものなく、子こ及び子こが  
顯あらはんと欲ほつする者ものの外ほかに、父ちちの誰たれたるを識しる者ものなし。二三 又また門徒もんたを  
顧かへりて、特とくに彼等かれらに謂いへり、爾等なんぢらが見みる所ところを見る目めは福さいはひなり。  
二四 蓋けだし我爾等われなんぢらに語つぐ、多おほくの預言者よげんしやと君王くんわうとは、爾等なんぢらが見みる所ところを  
見みんと欲ほつして、見みざりき、爾等なんぢらが聞きく所ところを聞きかんと欲ほつして、聞きかざ  
りき。二五 時ときに一ひとりの律法師りつぽふした起たちて、彼かれを試こころみて曰いへり、師しよ、我何われなに  
を爲なして永遠えいゑんの生命いのちを嗣つがんか。二六 彼かれは之これに謂いへり、律法りつぽふに何なにをか  
録ときせる、爾なんぢ如何いかに讀よむか。二七 答こたへて曰いへり、爾なんぢ心こころを盡つくし、靈たま  
を盡つくし、力ちからを盡つくし、意おもひを盡つくして、主爾しゆなんぢの神かみを愛あいせよ、又爾またなんぢの鄰となり  
を愛あいすること、己おのれの如ごとくせよ。二八 イイスス之これに謂いへり、爾なんぢの答こたへ  
し所ところ正ただし、之これを爲なせ、乃すなはち生なぎん。二九 然しかれども彼かれは己おのれを義ぎとせん  
と欲ほつして、イイススに謂いへり、我わが鄰となりとは誰たれぞや。三〇 イイスス答こた  
へて曰いへり、或人あるひとイエルサリムよりイエリホンに下くだる時とき、盜賊ぬすびとに遇あへ

り、彼等かれら其その衣ころもを剥はぎ、彼かれに傷きずつけ、幾ほとんど死しするばかりにして、彼かれを捨す  
て去されり。三一 適たまたま一ひとりの司祭しさい是この路みちより下くだりしが、彼かれを見て、過すぎ去さ  
れり。三二 同おなじく「レワイト」も彼處かしこに至いたり、近ちかづきて彼かれを見て、過すぎ去さ  
れり。三三 惟ただ或サマリヤ人は行ゆきて此こに至いたり、彼かれを見て憫あはれ  
きて、其傷そのきずに油あぶらと酒さけとを沃そぎて、之これを裹つみ、彼かれを己おのれの家畜かちくに乗のせ、  
旅館りよくわんに引ひき至いたりて、彼かれを看護かんごせり。三五 明日あくるひ行ゆかんとする時とき、銀二枚ぎんにまい  
を出いだし、館主あるじに與あたへて、之これに謂いへり、此この人ひとを看護かんごせよ、費つひ若えし之これ  
より益まさば、我返われかへる時とき爾なんぢに償つくのはん。三六 此この三人さんにんの中うち、爾孰なんぢいづれを盜賊ぬすびと  
に遇あひし者ものの鄰となりと意おもふか。三七 彼曰かれいへり、此この人ひとに矜恤あはれみを施ほしゝ者もの  
なり。イイスス彼かれに謂いへり、往ゆきて、爾も是かくの如ごとく行おこなへ。三八 彼等かれら  
が行ゆける時とき、イイスス一ひとの村むらに入りしに、或婦あるをんなマルファと名なづくる  
者もの、彼かれを其家そのいへに迎むかへたり。三九 其姊妹そのしまいにマリヤと名なづくる者ものあり、イ  
イススの足下そくかに坐ざして、其言そのことばを聽きけり。四〇 マルファは供事きやうじの多おほき  
に因よりて心こころを煩わづらはし、就つきて曰いへり、主しゆよ、我わがが姉妹しまい、我一人われひとりを遣こ  
して供事きやうじせしむるを爾意なんぢいと爲なさざるか、之これに命めいじて、我われを助たすけしめ  
よ。四一 イイスス彼かれに答こたへて曰いへり、マルファよ、マルファよ、爾なんぢ  
は多おほくの事ことを慮おもんばか、りて心こころを勞ろうせり、四二 然しかれども需もとむる所ところは一ひとつ  
み。マリヤは善よき分ぶんを擇えらびたり、是これは彼かれより奪うばふ可べからず。

第十一章 一 イイスス某處あるところに祈いのりて、既すでに休やめし時とき、其門徒そのもんとの一人ひとり彼

に謂へり、主よ、我等に禱ることを教へよ、イオアンも其門徒に教へしが如し。二 彼が之に謂へり、爾等禱る時言へ、天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は、天に行はるるが如く、地にも行はれん、三 我が日用の糧を毎日我等に與へ給へ、四 我等に我が罪を免し給へ、蓋我等も凡そ我等に負ふ者に免す、我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救ひ給へと。五 又彼等に謂へり、爾等の中孰か友あり、夜半彼に來りて、友よ、我に三の餅を借せ、六 蓋我が友途中より我に來りしに、我之に供すべき者なしと曰はんに、七 彼内より之に答へて、我を煩はす勿れ、門已に閉ぢ、我が兒曹我と與に床に在り、我起きて、爾に與ふる能はずと曰はん。八 我爾等に語ぐ、若し彼は友なるが故に、起きて彼に與へずば、乃其切迫に依りて、起きて其需むる如く彼に與へん。九 我も爾等に語ぐ、求めよ、然らば爾等に與へられん、尋ねよ、然らば遇はん、門を叩けよ、然らば爾等の爲に啓かれん。一〇 蓋凡そ求むる者は得、尋ぬる者は遇ひ、門を叩く者は啓かれん。一一 爾等の中父たる者、孰か其子餅を求めんに、之に石を與へ、或は魚を求めんに、之に魚に代へて蛇を與へ、一二 或は卵を求めんに、之に蠍を與へん。一三 然らば爾等惡しき者なるに、尚善き賜を其子に與ふるを知る、況んや天に在す父は、之に求むる者に、聖神を與へざらんや。一四 或時彼瘡なる魔鬼を逐ひ出せり、魔鬼出でて、瘡者言

ひしに、民之を奇とせり。一五 然れども其中の或者曰へり、彼は魔鬼の魁ワエエルゼウルに藉りて魔鬼を逐ひ出す。一六 他の者は彼を試みて、天よりする休徴を求めたり。一七 イイスス彼等の意を知りて、彼等に謂へり、凡の國自ら別れ争はゞ、荒墟となり、家自ら別れ争はゞ、倒れん。一八 若しサタナも別れ争はゞ、其國如何にして立たん。然るに爾等と言ふ、我ワエエルゼウルに藉りて魔鬼を逐ひ出すと。一九 若し我ワエエルゼウルに藉りて魔鬼を逐ひ出さば、爾等の諸子は誰に藉りて之を逐ひ出すか、故に彼等は爾等の審判者と爲らん。二〇 然れども若し我神の指に藉りて魔鬼を逐ひ出さば、則神の國果して爾等に臨みしなり。二一 強き者の武器を執りて、其家を守る時、其所有安全なり。二二 然れども彼より更に強き者來りて、彼に勝つ時は、其恃とせし武器を悉く奪ひて、贓物を分たん。二三 我と偕にせざる者は、我に敵し、我と偕に聚めざる者は、散らすなり。二四 汚鬼人より出でて後、水なき地を巡り、安息を求むれども、得ずして曰く、我曾て出でし我が家に歸らんと。二五 既に來りて、其家の掃き且飾りたるを見、二六 乃往きて、己よりも惡しき他の七鬼を攜へ來り、偕に入りて、彼處に居るなり。是に於て其人の爲に後の患は先より更に甚し。二七 此を言ふ時、一の婦民の中より聲を揚げて、彼に謂へり、爾を孕みし腹と爾が嘔ひし乳とは福なり。二八 彼は曰へり、然り、神の言を聽きて之を守る者は福なり。二九 民の多く集れる

時彼宣べ始めて曰へり、此の世は悪しくして、休徴を求む、而して預言者イオナの休徴の外、之に休徴は與へられざらん。三〇 蓋イオナがニネワイヤ人の爲に休徴と爲りし如く、人の子も此の世の爲に是くの如く爲らん。三一 南方の女王は審判の時に斯の世の人と共に起ちて、彼等を罪せん、蓋彼は地の極よりソロモンの智慧を聽かん爲に來れり、視よ、此にはソロモンより大なる者あり。三二 ニネワイヤの人は審判の時に斯の世と共に起ちて、之を罪せん、蓋彼等はイオナの傳教に由りて悔改せり、視よ、此にはイオナより大なる者あり。三三 燈を燃して、之を隠れたる處、或は斗の下に置く者あらず、乃燈臺の上に置く、入る者が光を見ん爲なり。三四 身の燈は目なり、故に爾の目の淨き時は、爾の全身も明なり、其惡しき時は、爾の身も暗し。三五 故に慎め、爾が中の光の暗とならざらんことを。三六 若し爾の全身明にして、一部の暗き處もなくば、則全く明ならん、燈の其光を以て爾を照すが如し。三七 彼が言ふ時、或フアリセイ彼と共に食せんことを請ひたれば、彼入りて席坐せり。三八 フアリセイは彼が食する前に手を洗はざりしを見て、異めり。三九 主は之に謂へり、爾等フアリセイ今杯と盤との外を潔むれども、爾等の中には貪婪と惡慝とに充てり。四〇 無知なる者よ、外を造りし者は亦内をも造りしに非ずや。四一 惟所有の中より施濟を爲せ、然らば爾等の爲に皆潔からん。四二 禍なる哉爾等フ

アリセイよ、蓋爾等は薄荷、芸香、及び凡の野菜の十分の一を納めて、義と神に於ける愛とを遺つ、此れ行ふ可きなり、彼も亦遺つ可からず。四三 禍なる哉爾等フアリセイよ、蓋爾等の會堂には首座、街衢には問安を好む。四四 禍なる哉爾等僞善なる學士及びフアリセイ等よ、蓋爾等は隠れたる墓に似たり、其上を履む人は之を知らず。四五 律法師等の一人彼に答へて曰へり、師よ、爾之を言ひて、我等を辱しむ。四六 彼曰へり、爾等律法師も禍なる哉、蓋爾等は負ひ難き任を人に任はせて、己は一の指をも其任に觸れず。四七 爾等禍なる哉、蓋爾等は其先祖が殺し、預言者の墓を建つ。四八 是を以て爾等は先祖の爲し、ことを證し、且之に與す、蓋彼等は預言者を殺し、爾等は其墓を建つ。四九 故に神の智慧も言へり、我預言者及び使徒等を彼等に遣さん、彼等は其中或者を殺し、或者を逐はん、五〇 創世以來流されし諸預言者の血は、五一 アワエリの血より、祭壇と殿との間に殺されしザハリヤの血に至るまで、皆此の代より索められん爲なり。然り、我爾等に語ぐ、是れ此の代より索められん。五二 禍なる哉爾等律法師よ、蓋爾等は知識の鑰を取て、自ら入らず、入る者をも阻めり。五三 彼が之を言ふ時、學士等及びフアリセイ等迫りて、彼を詰り、彼に多くの事を答へしめ、五四 彼を伺ひて、其口より出づる何事をか捕へんと欲せり、彼を罪せん爲なり。

第十二章 一 民數萬集りて、相蹂むに至れる時、彼先づ其門徒に謂

へり、謹みてフアリセイ等の醉を防げ、是れ偽善なり。二 覆はれて露れざる者なく、隠れて知られざる者なし。三 故に爾等が暗中に言ひし事は、光の中に聞えん、密なる室に於て耳に附きて語りし事は、屋の上に傳へられん。四 我爾等我が友に言ふ、身を殺して後に何事をも爲す能はざる者を懼るる勿れ。五 我爾等に誰をか懼るべきを示さん、即殺して後に地獄に投ずる權を有つ者を懼れよ、然り、我爾等に語り、斯の者を懼れよ。六 五の雀は二錢にて售らるるに非ずや、然るに其一も神の前に忘れられず。七 爾等に於ては首の髪も皆數へられたり。故に懼るる勿れ、爾等は多くの雀より貴し。八 我又爾等に語り、凡そ我を人の前に認めん者は、人の子も彼を神の使等の前に認めん。九 我を人の前に諱まん者は、神の使等の前に諱まれん。一〇 凡そ人の子に敵して言を出す者は赦されん、然れども聖神を瀆す者は赦されざらん。一一 爾等を曳きて、會堂、又は政を執り權を有つ者の前に至らん時如何に、或は何を答ふべく、或は何を言ふべきを慮る勿れ。一二 蓋其時聖神爾等に言ふべきことを教へん。一三 民の中の一人彼に謂へり、師よ、我が兄弟に我と遺産を分つことを命ぜよ。一四 彼は之に謂へり、人よ、誰か我を立て、爾等の裁判官或は分配者と爲したる。一五 是に於て彼等に謂

へり、慎みて貪を防げ、蓋人の生命は其所有の饒なるに因らざるなり。一六 又譬を設けて彼等に謂へり、或富める人に田畝の善く實れるあり、一七 彼自ら付りて曰へり、我何を爲さんか、蓋我が作物を藏むべき處なし。一八 又曰へり、我斯く爲さん、我が倉を毀ちて、更に大なる者を建て、此の中に我が悉くの穀物と貨物とを聚めて、一九 我が靈に謂はん、靈よ、爾には多年の爲に蓄へたる多くの貨物あり、息み、食ひ、飲み、樂めと。二〇 然れども神は彼に謂へり、無知なる者よ、今夜爾の靈を爾より索めん、然らば爾が備へし所の者は誰に歸せんか。二一 凡そ己の爲に財を積み、神に於て富まざる者は是くの如し。二二 又其門徒に謂へり、故に我爾等に語り、爾の生命の爲に何を食ひ、爾等の身體の爲に何を衣んと慮る勿れ。二三 生命は糧より大にして、身體は衣より大なり。二四 試に鴉を思へ、彼等は稼かず穡らず、倉もなく納屋もなし、而して神は之を養ふ、爾等は鳥より貴きこと幾何ぞ。二五 且爾等の中誰か慮りて、其身の長一尺だに延ぶるを得ん。二六 然らば至と小き事すら能せざるに、何ぞ其餘の事を慮る。二七 試に百合の如何にか長ずるを思へ、勞かず紡がず、然れども我爾等に語り、ソロモンも其榮華の極に於て、其衣猶此の花の一に及ばざりき。二八 今日野に在り、明日爐に投げらるる草にも、神は斯く衣すれば、況んや、爾等をや、小信の者よ。二九 故に爾等何を食ひ、或は何を飲

まんと求むる勿れ、亦思ひ煩ふ勿れ、三〇 蓋此れ皆世の異邦人の求むる所なり、爾等の父は此等の者の爾等に必要なるを知る。三一 惟神の國を求めよ、然らば此れ皆爾等に加はらん。三一 小さき群よ、懼るる勿れ、蓋爾等の父は爾等に國を賜はんことを喜べり。三三 爾等の所有を售りて、施濟を爲せ、己の爲に古びざる囊、盡きざる財を天に備へよ、彼處には盜賊近づかず、蠱壞はず。三四 蓋爾等の財の在る所には、爾等の心も在らん。三五 爾等の腰は帶せられ、爾等の燈は燃ゆべし。三六 爾等の其主が婚筵より歸るを俟ちて、彼來りて門を叩く時、直に彼の爲に啓かんとする人人に似るべし。三七 主來りて其諸僕の徹醒するを見れば、彼等は福なり、我誠に爾等に語り、彼自ら腰に帶し、彼等を席坐せしめ、前みて彼等に供事せん。三八 若し第二更に來り、又第三更に來りて、彼等の是くの如きを見れば、其諸僕福なり。三九 若し家主盜賊の何の時に來るを知らば、徹醒して、其家を穿つを許さざらん、是れ爾等の知る所なり。四〇 故に爾等も己を備へよ、蓋爾等が意はざる時に人の子來らん。四一 ペトル彼に謂へり、主よ、此の譬は我等に言ふか、抑衆人に言ふか。四二 主曰へり、孰か忠にして智なる家宰、其主が諸僕の上に立て、時に隨ひて、彼等に定量の糧を與へしむる者たる、四三 主の來る時、彼が斯く行ふを見れば、其僕福なり。四四 我誠に爾等に語り、彼を立て、其一切の所有を督らしめん。四五 然

れども若し其僕心の中に、我が主の來るは遅からんと曰ひて、僕婢を打ち、食ひ飲み且酔へば、四六 乃俟たざる日、知らざる時に、其僕の主來りて、彼を斷ち、彼を不忠の者と同じき分に處せん。四七 其主の旨を知りて備へず、其旨に順ひて行はざりし僕は、多く扑たれん、四八 知らずして罰に當たる事を行ひし者は、少く扑たれん。凡そ多く與へられし者は、多く促されん、多く託せられし者は、更に多く索められん。四九 我火を地に投ぜん爲に來り、此の火の已に燃えんとを、我望むこと幾何ぞ。五〇 我に受くべき洗禮あり、其成るに至るまで、我憂に迫ること如何ばかりぞ。五一 爾等は我和平を地に與へん爲に來れりと意ふか、我爾等に謂ふ、然らず、即分離なり。五二 蓋是より後、一家に五人分離して、三人は二人、二人は三人に敵せん、五三 父は子に、子は父に敵し、母は女に、女は母に敵し、姑は其婦に、婦は其姑に敵せん。五四 又民に謂へり、爾等雲の西より起るを見れば、直に言ふ、雨ふらんと、果して然り。五五 風の南より吹くを見れば、言ふ、暑くならんと、果して然り。五六 僞善者よ、爾等天地の面を別つを知りて、何ぞ此の時を別たざる。五七 且爾等何ぞ己に依りて、宜しき所を判斷せざる。五八 爾を訴ふる者と偕に有司に往く時、途中に在りて彼より釋を得んことを勉めよ、恐らくは彼爾を曳きて、裁判官に至り、裁判官爾を下吏に付し、下吏は爾を獄に下さん。五九 我爾に語り、爾毫釐だに償はずば、彼

より出づるを得ず。

第十三章 一 其時數人來りて、ピラトが其血を其祭所に糝へしガリレヤ人の事をイイスに告げたり。二 彼は之に答へて曰へり、爾等此のガリレヤ人は斯く苦を受けし故に、悉くのガリレヤ人より多く罪ありしと意ふか。三 我爾等に語ぐ、然らず、乃爾等若し悔改せずば、皆是くの如く亡びん。四 或は彼のシロアムの塔倒れて殺せし十八人は、悉くのイエルサリムに居る者より多く罪を負ひたりと意ふか。五 我爾等に語ぐ、然らず、乃爾等悔改せずば、皆同じく亡びん。六 又譬を設けて曰へり、或人、其葡萄園に植ゑたる無花果樹ありしに、來りて、之に果を求むれども、得ざりき。七 遂に園丁に謂へり、視よ、我三年來りて、此の無花果樹に果を求むれども、得ず、之を斫れ、何ぞ徒に地を塞ぐ。八 園丁彼に對へて曰く、主よ、今年も之を容して、我が其周圍を掘りて、肥料を置くを待て、九 或は果を結ばん、否ずば、後に之を斫らん。一〇 安息日に彼一の會堂に在りて教を宣べたり。一一 爰に十八年病の鬼を患ふる婦あり、偃みて、少しも伸ぶる能はざりき。一二 イイスス之を見て、呼びて之に謂へり、婦よ、爾は其病より釋かれたり。一三 乃手を彼に按せられたば、彼直に伸びて、神を讚榮せり。一四 會堂の宰、イイススが安息日に醫を施し、を熅りて、民に謂へり、工作を爲すべき日は

六日あり、其中に來りて醫されよ、安息の日に於てせざれ。一五 主彼に答へて曰へり、僞善者よ、爾等各安息日に於て其牛或は驢を槽より解き、之を曳きて飲はざるか、一六 況やアウラムの女なる此の婦十八年サタナに縛られたる者の結を、安息の日に於て解くべからざりしか。一七 彼が之を言ふ時、彼に敵する者は皆愧ぢ、衆民は彼が凡の光明なる行事を喜べり。一八 彼曰へり、神の國は何に似たるか、我之を何に譬へん。一九 是れ芥種、人取りて其園に播きたる者の如し、乃長じて大なる樹となり、天空の鳥其枝に棲めり。二〇 又曰へり、神の國を何に譬へん。二一 是れ酵の如し、婦之を取りて、三斗の麴の中に納れしに、悉く発酵するに至れり。二二 イイスス諸の邑及び村を経て、教を宣べ、イエルサリムに向ひて行けり。二三 或彼に謂へり、主よ、救はるる者寡きか。二四 イイスス彼等に謂へり、力を竭くして窄き門より入れ、蓋我爾等に語ぐ、多くの者は入るを求めて得ざらん。二五 家主起きて門を閉ぢて後、爾等外に立ちて、門を叩きて曰はん、主よ、主よ、我等の爲に啓け、彼爾等に答へて曰はん、我爾が奚れよりするを識らず。二六 其時爾等曰はん、我爾の前に食飲し、爾亦我等の嚮に教へたり。二七 然れども彼曰はん、我爾等に語ぐ、我爾等が奚れよりするを識らず、凡そ不義を行ふ者は我より離れよと。二八 時に爾等アウラム、イサク、イアコフ及び諸預言者が神の國に在り、己が外に逐はるるを見

て、彼處に哭き切齒せん。二九 東より、西より、北より、南より、人來りて、神の國に席坐せん。三〇 視よ、後なる者の先となり、先なる者の後となることあらん。三一 當日或フアリセイ等就きて、彼に謂へり、出でて此を離れよ、蓋イロド爾を殺さんと欲す。三二 彼は之に謂へり、往きて、彼の狐に告げよ、視よ、我今日及び明日魔鬼を逐ひ出し、醫を施し、第三日に終らん。三三 然れども今日明日及び次の日に我行くべし、蓋諸預言者のイエルサリムの外に亡ぶるは有らざるなり。三四 イエルサリムよ、イエルサリムよ、預言者を殺し、爾に遣されし者を石にて撃つ者よ、我幾次か、母鶏が其雛を翼の下に集むる如く、爾の諸子を集めんことを欲したれども、爾等は欲せざりき。三五 視よ、爾等の家は虚しくして爾等に遺さる、我爾等に語ぐ、今より後、主の名に因りて來る者は祝福せらると云ふ時に至るまで爾等我を見ざらん。

第十四章 一 イイスス安息日の一の宰なるフアリセイの家に入りて、餅を食ふことありしに、人人彼を窺へり。二 爰に水腫病を疾める人の彼の前に立てるあり。三 イイスス律法師及びフアリセイ等に問ひて曰へり、安息日に醫を施すは宜しきか。四 彼等默然たり。彼は其人に觸れて、之を醫して、去らしめたり。五 又彼等に謂へり、爾等の中誰か 驢 或は牛の井に陥ることあらんに、安息の日にも直に

之を曳き出さざらんか。六 彼等之に對ふる能はざりき。七 招かれたる者の首座を擇べるを見て、醫を設けて彼等に謂へり、八 爾人より婚筵に招かれん時、首座に坐する勿れ、恐らくは爾より尊き者の招かるるありて、九 爾と彼とを招きし者來りて、爾に謂はん、斯の人に座を譲れと、其時爾等羞ぢて、末座に就かん。一〇 乃招かれん時、往きて末座に坐せよ、爾を招きし者來らん時、爾に、友よ、上座に進めと言はん爲なり、其時爾同席者の前に於て榮あらん。一一 蓋凡そ自ら高くする者は卑くせられ、自ら卑くする者は高くせられん。一二 又彼を招きし者に謂へり、爾午餐或は晚餐を設くる時、爾の朋友をも、兄弟をも、親戚をも、富める鄰をも、招く勿れ、恐らくは彼等も亦爾を招きて、爾報を受けん。一三 乃筵を設くる時貧乏、廢疾、跛者、瞽者を招け、一四 然らば彼等が爾に報ゆる能はざるに因りて、爾福なり、義者の復活の時に爾報を得んとすればなり。一五 彼と偕に席坐せる一人、此を聞きて、彼に謂へり、神の國に於て餅を食はん者は福なり。一六 彼は之に謂へり、或人大なる晚餐を設けて、多くの者を招きたり。一七 晚餐の時に及び、其僕を遣して、招かれたる者に謂へり、來れ、蓋一切已に備はれり。一八 彼等皆同じく辭したり。第一の者曰へり、我田地を買ひたり、往きて之を見んことを要す、請ふ、我が辭するを允せ。一九 他の者曰へり我牛五耦を買ひたり、是を試みん爲に往く、請ふ、我が辭するを允



せ。二〇又他の者曰へり、我妻を娶りたり、是の故に來る能はず。二二其僕歸りて、之を主に告げたれば、家主怒りて、其僕に謂へり、速に邑の衢と巷とに出でて、貧乏、廢疾、跛者、瞽者を此に引き來れ。二三僕曰へり、主よ、爾の命ぜし如く行ひたれども、尚餘れる座あり。二三主は僕に謂へり、道路及び藩籬の間に出でて、入らんことを説得して、我が家に盈たしめよ。二四蓋我爾等に語ぐ、彼の招かれたる人は、一も我が晩餐を嘗めざらん。蓋召されたる者は多けれど、選ばれたる者は少し。二五衆くの民彼と偕に行けるに、彼は顧みて、之に謂へり、二六人若し我に來りて、其父母、妻子、兄弟、姉妹又己の生命をも憎まずば、我が門徒と爲るを得ず。二七己の十字架を任ひて、我に従はざる者も、亦我が門徒と爲るを得ず。二八蓋爾等の中孰か塔を建てんと欲して、先づ坐して、其資金の之を成すに足れるかを計らざらん。二九恐らくは其基を置きて、終ふること能はずば、見る者皆彼を哂ひて曰はん。三〇此の人建て始めて、終ふること能はざりきと。三二或は何れの王か出でて、他の王と戰はんに、先坐して、一萬を以て夫の二萬を率ゐて來り攻むる者に敵するを得るかを籌らざらん。三三然らずば、敵の尚遠く在る時彼使を遣して、和を請はん。三三是くの如く爾等の中、凡そ其有てる所を捨てざる者は、我が門徒と爲るを得ず。三四鹽は善き物なり、然れども鹽若し其味を失はざ、何を以て之を鹹くせん、三五地にも肥料に

も宜しからず、惟之を外に棄つ。耳ありて聽くを得る者は聽くべし。

第十五章 一 稅吏及び罪人等はイイススに聽かん爲に、皆彼に近づけり。二フアリセイ等と學士等と之を怨みて曰へり、彼は罪人等を納れて、之と共に食す。三彼此の譬を設けて彼等に曰へり、四爾等の中何人か、一百の羊ありて、其一を失はざ、九十九を野に舍き、往きて、亡はれし者を獲るに至るまで之を尋ねざらんや、五之を獲て、喜びて己の肩に任ひ、六家に歸りて、其友及び鄰を呼び集めて、彼等に謂はん、我と共に喜べ、蓋我は亡はれし羊を獲たりと。七我爾等に語ぐ、是くの如く天には一の悔い改むる罪人の爲の喜は、悔改を要せざる九十九の義人の爲の喜に勝らん。八或は何の婦か、金錢十枚ありて、其一枚を失はざ、燈を燃し、室を掃ひ、獲るに至るまで、勤めて尋ねざらんや、九之を獲て、其友の及び鄰を呼び集めて曰はん、我と共に喜べ、蓋我は失ひし金錢を獲たりと。一〇我爾等に語ぐ、是くの如く神の使等の前には、一の悔い改むる罪人の爲に喜あり。一一又曰へり、或人に二の子あり、一二其次子父に謂へり、父よ、我が得べき産業の分を我に與へよ、父其産業を彼等に分てり。一三幾日も経ざるに、次子は其得たる者を盡く集めて、遠き地に旅行し、彼處に放蕩に生活して、其産業を浪費せり。一四 盡く耗し、に及びて、其地に大なる饑饉起り、彼始めて乏し

きを覺えたり。一五 乃往きて、其地の住民の一人に身を寄せたれば、其人彼を田に遣して豕を牧はしめたり。一六 彼は豕の食ふ豆莢を以て、其腹を充たさんと欲したれども、彼に與ふる者なかりき。一七 遂に自ら省みて曰へり、我が父には幾何かの傭人の糧に餘れるあるに、我は飢えて亡ぶ。一八 起ちて、我が父に往きて、之に謂はん、父よ、我天及び爾の前に罪を獲たり、一九 既に爾の子と稱へらるるに堪へず、我を爾が傭人の一の如く爲せと。二〇 乃起ちて、其父に往けり。尚遠く在りし時、其父彼を見て憫み、趨り前みて、其頸を抱きて、彼に接吻せり。二一 子は之に謂へり、父よ、我天及び爾の前に罪を獲たり、既に爾の子と稱へらるるに堪へず。二二 然れども父は其諸僕に謂へり、最も美しき衣を出して、彼に衣せよ、指環を其手に、屨を其足に施せ。二三 且肥えたる犢を牽きて、之を宰れ、我等食ひ樂しまん。二四 蓋此の我が子は死して復生き、失はれて又得られたり。是に於て彼等樂しめり。二五 適其長子田に在りしが、歸りて、家に近づける時、樂と舞とを聞きたれば、二六 一の僕を呼びて、是れ何事ぞと問ひしに、二七 彼曰へり、爾の弟來りしなり、爾の父は、其恙なくして彼を得たるに因りて、肥えたる犢を宰りたり。二八 長子怒りて、入るを欲せざりき。其父出でて、彼に勧めしに、二九 彼父に答へて曰へり、視よ、我多年爾に事へて、未だ嘗て爾の命に違はざれども、爾未だ嘗て小山羊を我に與へて、我

を友と共に樂しましめざりき。三〇 然るに此の爾の子、妓と共に爾の産業を耗し、者の來たりし時は、爾彼の爲に肥えたる犢を宰れり。三一 父彼に謂へり、子よ、爾は常に我と偕に在り、我に屬する者は皆爾に屬す。三二 唯此の爾の弟は死して復生き、失はれて、又得られたるが故に、我等喜び樂しむべきなり。

**第十六章** 一 イイスス又其門徒に謂へり、或富める人に管理者ありて、其主の産業を耗すと彼に訴へられたり。二 主彼を呼びて曰へり、我が爾に付きて聞く事は斯れ何ぞや、管理の報告を出せ、蓋爾は仍管理するを得ず。三 管理者意に謂へり、我が主我より管理の職を奪ふ、我何を爲さんか、鋤くには力なく、乞ふは耻づ。四 我爲すべき事を知る、我が管理の職の解かれん時、人人に我を其家に接しめん爲なりと。五 乃其主の負債者を一一呼びて、其第一の者に謂へり、爾我が主に負ふこと幾何ぞ。六 曰へり、油百斗なり。彼に謂へり、爾の券を取り、亟に坐して、五十と書け。七 次に他の者に謂へり、爾負ふこと幾何ぞ。曰へり、麥百斛なり。彼に謂ふ、爾の券を取りて、八十と書け。八 主は不義なる管理者を譽めたり、其爲し、事の巧なるが故なり、蓋此の世の諸子は、其族類に於て、光の諸子に較ぶれば更に巧なり。九 我も爾等に語ぐ、不義の財を以て、己の爲に友を求めよ、爾等の匱からん時、彼等が爾等を永遠の宅に

接けん爲なり。一〇 少き事に於て忠なる者は、多き事に於ても忠なり、少き事に於て不義なる者は、多き事に於ても不義なり。一一 故に爾等若し不義の財に於て忠ならずば、誰か爾等に眞の財を託せん。一二 若し他に屬する者に忠ならずば、誰か爾等に屬する者を爾等に與へん。一三 僕は二人の主事に事ふる能はず、蓋或は此を惡み、彼を愛し、或は此を重んじて、彼を輕んぜん。爾等は神と財とに兼ね事ふる能はず。一四 利を好むフアリセイ等も、悉く之を聞き、而して彼を晒へり。一五 彼は之に謂へり、爾等人人の前に己を義と爲す、然れども神は爾等の心を知れり、蓋人人の中に高しとする事は、神の前に惡むべきなり。一六 律法と預言者とはイオアンに至りて止れり、其時より神の國は福音せられ、人人力を用ゐて之に進む。一七 然れども天地の廢するは、律法の一畫の闕くるに較ぶれば、更に易し。一八 凡そ其妻を出して、他に娶る者は、姦淫を行ふなり、夫に出されたる婦を娶る者も、亦姦淫を行ふなり。一九 富める人あり、紫袍と細布とを衣、日日奢り樂めり。二〇 亦貧しき者ラザリと名づくるあり、全身腫物を病みて、富める人の門に臥し、二一 其食卓より遺つる屑を以て、腹を果たさんと欲せり、犬も來りて、其腫物を舐れり。二二 貧しき者死して、天使等に因りてアウラアムの懷に送られ、富める者も死して葬られたり。二三 地獄の苦の中に在りて、彼其目を擧げて、遙にアウラアム及び其懷に在る

ラザリを見たり。二四 乃呼びて曰へり、父アウラアムよ、我を憐み、ラザリを遣して、其指の尖を水に蘸して、我が舌を涼さしめよ、蓋我此の燄の中に苦む。二五 然れどもアウラアム曰へり、子よ、爾は存命の時爾の善を受け、ラザリは同じく其惡を受けたりしを憶へ、今彼は此に慰み、爾は苦む。二六 第此のみならず、爾等と我等との間に巨なる淵は限れり、故に此より爾等に涉らんと欲する者は能はず、彼よりも我等に渉るを得ず。二七 彼曰へり、然らば父よ、請ふ、ラザリを我が父の家に遣せ、二八 蓋我に五人の兄弟あり、彼をして其前に證を爲さしめよ、彼等も此の苦の處に來らざらん爲なり。二九 アウラアム之に謂ふ、彼等にモイセイ及び預言者あり、之に聽くべし。三〇 彼曰へり、否、父アウラアムよ、然れども若し死の中より彼等に向く者あらば、彼等悔改せん。三一 アウラアム曰へり、若しモイセイ及び預言者に聽かずば、縦ひ死より復活する者ありとも信ぜざらん。

**第十七章** 一 イイスス又其門徒に謂へり、誘惑は來らざるを得ず、惟之を來す者は禍なる哉。二人此の小子の一人を罪に誘はんよりは、寧磨石を其頸に懸けられて、海に投ぜられん。三 己を慎め、若し爾の兄弟爾に罪を獲ば、彼を戒めよ、若し悔いば、彼に免せ。四 若し一日に七次爾に罪を獲、亦一日に七次自ら省みて、我悔ゆ

と曰はゞ、彼に免せ。五使徒等主に謂へり、我等に信を益せ。六主曰へり、若し爾等に芥種の如き信あらば、此の桑に、抜けて海に植われと言ふとも、爾等に聽かん。七孰か爾等の中に耕へし、或は畜を牧ふ僕あらんに、其田より歸りて後、之に直に來りて席坐せよと云ふ者あらんや、豈彼に曰はずや、我が晚餐を備へ、私の食飲する間、帶を束ねて我に事へ、後爾食飲せよと。九彼は其僕が命ぜられしことを行ひし爲に、之に謝せんか、我之を意はず。一〇是くの如く爾等も、凡そ爾等に命ぜられし事を行ひし時には謂へ、我等は無益の僕なり、行ふべき事を行ひしのみと。一一彼イエエルサリムに往くに、サマリヤとガリレヤとの間を経たり。一二或村に入る時、癩病者十人彼を迎へ、遠く立ちて、聲を揚げて曰へり、一三イエイス夫子よ、我等を憐め。一四イエイス彼等を視て、曰へり、往きて、己を司祭等に示せ。彼等往く時潔まれり。一五其中一人、己の愈されしを見て、返りて、大聲を以て神を讚榮し、一六イエイスの足下に俯伏して感謝せり、彼はサマリヤの人なり。一七イエイス曰へり、潔まりし者は十人に非ずや、其九は何處に在るか、一八此の異族人の外、如何ぞ返りて、光榮を神に歸せざる。一九又彼に謂へり、起ちて往け、爾の信は爾を救へり。二〇ファリセイ等に、神の國は何の時に來ると問はれて、彼等に答へて曰へり、神の國は顯に來らず、二一人人、視よ、此處に在り、或は視よ、彼處に在りと、曰はざらん。蓋視よ、神の國は

爾等の衷に在り。二三又門徒に謂へり、爾等人の子の一日を見んと欲す時至らん、而して之を見ざらん。二三一人人爾等に、視よ、此處に在り、或は視よ、彼處に在りと謂はん、往く勿れ、從ふ勿れ。二四蓋電が天の此の涯より閃きて、天の彼の涯にまで光るが如く、人の子も其日に是くの如くならん。二五然れども彼は先づ多く苦を受けて、此の世に棄てらる可し。二六ノイの日に在りし如く、人の子の日にも是くの如くならん。二七一人人食ひ飲み、娶り嫁ぎて、ノイの方舟に入る日に至り、洪水來りて、盡く彼等を滅せり。二八同じく又ロトの日に在りし如し一人人食ひ飲み、買ひ賣り、樹を構造せり、二九然れどもロトがソドムより出でし日、天より火と硫黄と雨りて、盡く彼等を滅せり。三〇人の子の顯るる日にも亦是くの如くならん。三一當日屋の上に在らん者は、其器家に在らば、之を取らん爲に下る可からず、田に在らん者も、同じく後へ歸る可からず。三二口トの妻を記憶せよ。三三己の生命を救はんと求むる者は、之を喪はん、之を喪ふ者は、之を存せん。三四我爾等に語ぐ、其夜二人榻を同じくせんに、一人は取られ、一人は遺されん。三五二人の婦共に磨を旋かんに、一人は取られ、一人は遺されん。三六二人田に在らんに、一人は取られ、一人は遺されん。三七彼等問ひて曰く、主よ、何處にか之れ有る。彼は之に謂へり、屍の在る所には、鷲集らん。

第十八章 一 イイスス又譬を設けて、彼等に恒に祈禱して倦むべからざることを言へり、二 曰く、或邑に裁判官あり、神を畏れず、人に耻ぢず。三 其邑に一の嫠あり、彼に來りて曰へり、我を我が仇より援けよ。四 彼久しく肯はざりしが、其後自ら思ひて曰へり、我神を畏れず、人に耻ぢずと雖、五 此の嫠我を煩はすに因りて、我之を援けん、其恒に來りて、我に聒しくせざらん爲なり。六 主曰へり、不義なる裁判官の言ふ所を聽け。七 神は晝夜彼に籲ぶ所の其選びたる者を、久しく忍ぶとも、遂に援けざらんや。八 我爾等に語ぐ、速に彼等に援けん。然れども人の子來りて、信を地に見んや。九 又己を義なりと信じて、他人を藐る者に、此の譬を語れり。一〇 二人祈禱せん爲に殿に登れり、一はファリセイ、一は税吏なり。一ニファリセイ立ちて、己の衷に斯く禱れり、神よ、我爾に感謝す我他人の殘酷、不義、姦淫なる如く、或は此の税吏の如くならざるを以てなり。二 我一七日に、二次齋し、凡そ得る所の十分の一を獻ぐと。一三 税吏は遠く立ちて、敢て目を舉げて天を仰がず、乃膺を拊ちて曰へり、神よ、我罪人を憐めと。一四 我爾等に語ぐ、此の人は彼の人よりは義とせられて、家に歸れり。蓋凡そ自ら高くする者は卑くせられ、自ら卑くする者は高くせられん。一五 嬰兒を彼に攜へ來れるあり、彼等に觸れん爲なり、門徒見て、之を戒めたり。一六 然れどもイイスス彼等と呼びて曰へり、幼兒の我に就くを容せ、之に禁する勿

れ、蓋神の國は是くの如き者に屬す。一七 我誠に爾等に語ぐ、幼兒の如くに神の國を承けざる者は、之に入るを得ず。一八 或宰彼に問ひて曰へり、善なる師よ、我永遠の生命を嗣がん爲に何を爲すべきか。一九 イイスス彼に謂へり、爾は何ぞ我を善と稱ふる、獨神より外に善なる者なし。二〇 爾は誠を識れり、淫する母れ、殺す母れ、竊む母れ、妄證する母れ、爾の父母を敬へ。二一 彼曰へり、我幼きより皆之を守れり。二二 イイスス之を聞きて、彼に謂へり、爾に猶一の足らざる事あり、悉く爾の所有を售りて、貧者に施せ、然らば財を天に有たん、且來りて我に従へ。二三 彼之を聞きて、甚憂ひたり、巨に富める故なり。二四 イイスス其甚憂ひたるを見て曰へり、富を有つ者の神の國に入るは難き哉。二五 蓋駱駝が針の孔を穿るは、富める者が神の國に入るより易し。二六 之を聞きし者曰へり、然らば誰か能く救はれん。二七 彼曰へり、人には能せざる所、神には能すなり。二八 ペトル曰へり、視よ、我等一切を捨て、爾に従へり。二九 イイスス彼等に謂へり、我誠に爾等に語ぐ、神の國の爲に家、或は父母、或は兄弟、或は姉妹、或は妻、或は子を捨て、三〇 而して斯の時に多倍を受け、未來の世に永遠の生命を受けざる者あらず。三一 十二門徒を招きて、彼等に謂へり、視よ、我等イエエルサリムに上る、而して預言者に因りて人の子を指して録されし事皆成らん。三二 蓋彼は異邦人に付され、嘲られ、辱められ、唾せられん。三

三人彼を鞭ち、彼を殺さん、而して第三日に彼復活せん。三四然れども彼等少しも之を曉らざりき、斯の言は彼等の爲に隠れて、彼等謂はれし事を知らざりき。三五 彼がイエリホンに近づける時、或警者道の旁に坐して乞へり。三六 民の過ぐるを聞きて、是れ何事ぞと問へば、三七 人人彼にイエイスナゾレイの過ぐるなりと告げたり。三八 彼呼びて曰へり、ダワイドの子イエイスよ、我を憐め。三九 前に行く者彼を禁めて黙さしむれども、彼愈大に呼べり、ダワイドの子よ、我を憐め。四〇 イエイス止りて、彼を攜へ来るを命じ、其近づきし時、之に問ひて四一 曰へり、我が爾に何を爲さんことを欲するか。彼曰へり、主よ、我が見るを得んことを。四二 イエイス彼に謂へり、見るを得よ、爾の信は爾を救へり。四三 彼直に見るを得、神を讚美して、イエイスに従へり。衆民是を見て、讚美を神に歸せり。

第十九章 一 イエイスイエリホンに入りて過ぎ行けり。二 視よ、ザクヘイと名づくる者あり、税吏の長にして富める者なり。三 イエイスの如何なる人たるを見んと欲したれども、人の衆きに因りて見るを得ざりき、身の長短ければなり。四 乃趨り前みて、彼を見ん爲に無花果樹に升れり、彼此の旁を過ぎんとすればなり。五 イエイス此の處に來りし時、仰ぎて、之を見て曰へり、ザクヘイよ、速に下れ、蓋我今日爾の家に寓るべし。六 彼急ぎ下り、喜びてイエイス

を接けたり。七 人皆之を見て、怨みて曰へり、彼往きて罪人の客と爲れり。八 ザクヘイ立ちて、主に謂へり、主よ、我所有の半を以て、貧しき者に施さん、若し誣ひて人より收りしことあらば、四倍にして之を償はん。九 イエイス彼に謂へり、今日救は此の家に臨めり、此の人もアウラムの子なればなり。一〇 蓋人の子は亡びし者を尋ねて救はん爲に來れり。一一 彼等が之を聞く時、イエイス又譬を設けたり、蓋彼已にイエエルサリムに近づき、彼等は神の國直に顯るべしと意へり。一二 故に彼曰へり、或貴き人遠き地に往けり、國を受けて歸らん爲なり。一三 往く時十人の僕を召して、彼等に銀十斤を與へて曰へり、我が歸るまで貿易せよ。一四 其國民彼を憎みて、後より使を遣して曰へり、我等は斯の人の我等に王たるを欲せず。一五 彼が國を受けて歸りし時、彼の銀を與へし諸僕を召すことを命じたり、各幾何か利を獲たるを知らん爲なり。一六 第一の者來りて曰へり、主よ、爾の一斤は十斤を獲たり。一七 主彼に謂へり、善哉、善なる僕よ、爾は小き者に於て忠なりしに因りて、十の邑を宰れ。一八 其次の者來りて曰へり、主よ、爾の一斤は五斤を獲たり。一九 之にも謂へり、爾の五の邑を宰れ。二〇 又其次の者來りて曰へり、主よ、爾の一斤は此に在り、我中に裏みて之を護れり、二一 爾を畏れし故なり、蓋爾は嚴酷なる人にして、置かざりし者を取り、播かざりし者を穫る。二二 主彼に謂ふ、惡しき僕よ、我爾の口に依りて爾を鞫か

ん、爾は我が嚴酷なる人にして、置かざりし者を取り、播かざりし者を穫るを知りたらば、二三 何ぞ我が銀を兌換肆に預けざりし、然せば我來りて、之を利と與に受けしならん。二四 遂に前に立てる者に謂へり、彼より一斤を取りて、十斤を有てる者に與へよ。二五 彼等曰へり、主よ、彼已に十斤を有てり。二六 曰く、我爾等に語ぐ、凡そ有てる者には與へられ、有たざる者よりは、其有てる物も奪はれん。二七 且彼の我が敵、我が彼等に王たるを欲せざりし者を、此に曳き來りて、我が前に誅せよ。二八 之を謂ひ畢りて、イイスス前に行き、イエルサリムに向ひて上れり。二九 橄欖山と名づくる山に遡く、ワイファギヤ及びワイファニヤに近づきし時、彼二人の門徒を遣して三〇 曰へり、前なる村に往け、其内に入らば、繋ぎたる小 驢、人の未だ曾て乗らざりし者に遇はん、之を解きて牽き來れ。三一 若し爾等に何爲れぞ解くと問ふ者あらば、斯く彼に言へ、主之を需むと。三二 遣されし者往きて、彼が言ひし如き事に遇へり。三三 小 驢を解く時、其主彼等に謂へり、何ぞ小 驢を解く。三四 彼等曰へり、主之を需む。三五 乃之をイイススに牽き來り、己の衣を小 驢に掛け、イイススを其上に乗せたり。三六 彼が行く時、人人己の衣を道に布けり。三七 已に橄欖山より下路に近づける時、大衆の門徒は喜びて、其見し所の悉くの異能の爲に、大聲に神を讚美して三八 曰へり、主の名に因りて來る王は祝福せらる、天には和平、至高きには

光榮と。三九 民の中より或ファリセイ等彼に謂へり、師よ、爾の門徒を禁めよ、四〇 彼等は之に答へ曰へり、我爾等に語ぐ、若し彼等黙さば、石は呼ばん。四一 既に近づきし時、城を見て、之が爲に哭きて四二 曰へり、噫若し爾の日にだに、爾の平安に關する事を知りたらんには。然れども此れ今爾の目に隠れたり。四三 蓋日爾に至りて、爾の敵は壘を築きて、爾を繞り、四方より爾を攻め、四四 爾及び爾の中に爾の諸子を滅し、爾の中に石を石の上に遺さざらん、爾の眷顧の時を爾知らざりしに因りてなり。四五 遂に殿に入りて、其中に貿易する者を逐ひ出して、四六 彼等に謂へり、我が家は祈禱の家なりと録されたるに、爾等之を盜賊の巢窟と爲せり。四七 乃日殿に在りて、教を宣べたり、司祭諸長、學士等、及び民の長老等彼を滅さんと謀りたれども、四八 爲す可き所を知らざりき、蓋民皆離れずして彼に聽けり。

第二十章 一 當時の一日、イイスス殿に在りて民を教へ、福音を宣ぶるに司祭諸長及び學士等は長老等と共に就きて、彼に謂へり、二 我等に語げよ、爾何の權を以て是を行ふか、或は誰か爾に此の權を與へたる。三 彼は之に答へて曰へり、我も亦一言爾等に問はん、我に語げよ、四 イオアンの洗禮は天よりせしか、抑人よりせしか。五 彼等竊に議して曰へり、若し天よりと云はゞ、爾何ぞ彼を信ぜざりし

と云はん、六若し人よりと云はゞ、民皆石を以て我等を撃たん、イオ  
アンを預言者と信ずればなり。七遂に答へて曰へり、奚れよりせしを  
知らず。ハイイスス彼等に謂へり、我も何の權を以て是を行ふを爾  
に語げざらん。九是に於て彼は此の譬を民に語れり、或人葡萄園を植  
ゑ、之を園丁に託して、他方に往きて久しく居たり。一〇期に及びて、  
彼は僕を園丁に遣して、彼に葡萄の實を與へしめんとせしに、園丁之  
を打ち、空しく返らしめたり。一一復他の僕を遣し、彼等之  
をも打ち、辱めて、空しく返らしめたり。一二又第三の者を遣し  
、之をも傷つけて、逐ひ出せり。一三其時葡萄園の主曰へり、我何  
を爲さんか、我が至愛の子を遣さん、或は彼を見て愧ぢんと。一四然  
れども園丁彼を見て、相議して曰へり、此れ嗣子なり、往きて彼を殺  
さん、其嗣業の我等の有とならん爲なり。一五乃彼を葡萄園の外に  
曳き出して殺せり。然らば葡萄園の主は彼等に何を爲さんか。一六  
彼來りて、其園丁を滅し、葡萄園を他の者に託せん。之を聞きし者曰  
へり、願はくは此れ有らざらん。一七然るにハイイスス彼等に目を注ぎ  
て曰へり、録して、工師が棄てたる石は屋隅の首石と爲れりと、云ふ  
は何ぞや。一八凡そ此の石の上に倒るる者は壞られ、此の石の其上に  
墜つる者は碎かれん。一九斯の時司祭諸長と學士等とは彼に手を措  
かんと謀りたれども、民を懼れたり、其彼等を指して、此の譬を語  
りしを覺りたればなり。二〇乃彼を窺ひて、義者の爲をなせる間者

を遣して、言に因りて彼を羅せんと欲せり、彼を有司に、及び方伯  
の權威に解さん爲なり。二一彼等問ひて曰へり、師よ、我等は爾が正  
しく言ひ且教へ、貌を以て人を取らず、乃眞に神の道を教ふるを  
知る。二二我等税をケサリに納むるは宜しや否や。二三ハイイスス彼等  
の悪意を知りて曰へり、何ぞ我を試みる、二四銀一枚を我に示せ、斯  
に誰の像と號あるか。答へて曰へり、ケサリの。二五彼は之に謂へ  
り、然らばケサリの物をケサリに納め、神の物を神に納めよ。二六  
彼等民の前に其言を執ふるを得ず、其答を奇として默然たり。二七  
又復活なしと言ふサッドウケイ等の數人彼に就きて、問ひて二八曰  
く、師よ、モイセイ我等の爲に書して云へり、若し人の兄弟妻あり、子  
なくして死せば、兄弟其妻を娶りて、其兄弟の嗣を興すべしと。二  
九兄弟七人ありしが、第一の者妻を娶り、子なくし死せり。三〇第二  
の者此の妻を娶り、亦子なくして死せり。三一第三の者も之を娶り、  
其七に至るまで皆然り、共に子を遣さずして死せり。三二其後妻も  
亦死せり。三三然らば復活の時、彼は其中誰の妻と爲らんか、蓋  
し七人之を妻と爲せり。三四ハイイスス彼等に答へて曰へり、斯の世の  
諸子は娶るあり、嫁ぐあり、三五然れども彼の世、及び死より復活  
を得るに當れる者は娶るなく、嫁ぐなし、三六蓋已に死すること能  
はず、彼等は天使等と侔しく、且復活の子としては神の子なればな  
り。三七死者の復活することに付きては、モイセイも棘の篇に於て、



主をアウラムの神、イサクの神、イアコフの神と稱ふるを以て之を顯せり。三八 神は死者の神に非ず、乃 生者の神なり、蓋彼に在りては皆生くるなり。三九 或學士等答へて曰へり、師よ、爾の言ひし所善し。四〇 是より敢て復彼に問ふ所なかりき。四一 イイスス彼等に謂へり、人如何ぞハリストスをダワイドの子なりと云ふ。四二 ダワイド自ら聖詠の書に云ふ、主我が主に謂へり、爾我が右に坐して、四三 我が爾の敵を爾の足の蹠と爲すに迄れと。四四 斯くダワイドは彼を主と稱ふ、如何ぞ彼は其子たる。四五 民皆聽く時、彼其門徒に謂へり、四六 謹みて學士等を防げ、彼等は長き衣にて遊ぶを好み、街衢には問安、會堂には首座、筵には上座を喜ぶ、四七 彼等は廢の家を呑み、佯りて長き祈を爲す、彼等 尤 重き定罪を受けん。

第二十一章 一 イイスス目を擧げて、富める人人は其獻金を獻賽函に投ずるを見、二 又一人の貧しき廢の二「レプタ」を投ずるを見て三 曰へり、我誠に爾等に語ぐ、此の貧しき廢は衆人より多く投じたり、四 蓋彼等は皆其羨餘より獻金を神に投じ、彼は其乏しき所より、其有てる生計を盡く投じたり。五 或が殿の事、其美しき石と奉納品とを以て飾りたる事を語れる時、彼曰へり、六 日來らん、此の爾等が見る者の中、一の石も石の上に遺らずして、皆圮されん。七 彼等問ひて曰へり、師よ、何の時に此の事有らんか、又此等の成ら

んとする時は、如何なる兆あるか。八 彼曰へり、慎みて惑はざる勿れ、蓋多くの者は我が名を冒して來たり、是れ我なりと云はん、時は邇づけり、彼等の後に從ふ勿れ。九 爾等 戰と亂とを聞かん時、懼るる勿れ、蓋此等の事は先づ有るべし、然れども末期は未だ速ならず。一〇 其時彼等に謂へり、民は民を攻め、國は國を攻めん、一一 處處に大なる地震、饑饉、疫病あり、畏るべき現象、及び大なる休徵天よりするあらん。一二 凡そ此等の事の先に、人人其手を爾等に措き、爾等を窘逐して、會堂及び獄に解し、我が名の爲に爾等を諸王諸侯の前に曳かん。一三 爾等が此の事に遇ふは證を爲さん爲なり。一四 故に爾等の心を定めて、何を對へんと預め 慮る勿れ。一五 蓋我等に口と智慧とを與へて、凡そ爾等の仇をして辯駁敵對する能はざらしめん。一六 爾等又父母兄弟、親戚、朋友より解され、且爾等の中或者は殺されん。一七 爾等我が名の爲に衆人に憎まれん。一八 然れども爾等の首の髮の一も喪びざらん。一九 忍耐を以て爾等の靈を救へ。二〇 爾等イエルサリムが軍に圍まれたるを見る時は、其亡の近づきしを知れ。二一 其時イウデヤに在る者は山に遁るべし、城の中に在る者は此より出づべし、郷にある者は其中に入るべからず。二三 蓋此れ復讐の日なり、凡そ録されし事は應はん爲なり。二四 當日には妊める者と乳を哺ます者は 禍なる哉、蓋大なる 苗は地に在りて、怒は斯の民に及ばん。二五 彼等は劔の刃

に斃れ、又諸民の中に擄にせられん、イエルサリムは異邦民に蹂  
られて、異邦民の時の満つるに迄らん。二五 日月星辰には異象あり、  
地には諸民の煩悶と顛沛とあらん、海は轟きて濤たゝん。二六 人人  
畏懼に依り、又全地に來らんとする禍を俟つに依りて、氣の絶ゆる  
あらん、蓋天勢は震ひ動かん。二七 其時人の子が權能と大なる光榮  
とを以て、雲に乗りて來るを見ん。二八 此等の事の成り始むる時、起  
きて爾等の首を翹げよ、蓋爾等の贖は近づけり。二九 又譬を設  
けて彼等に謂へり、無花果樹及び凡の樹を觀よ。三〇 己に萌す時は、  
爾等之を見て、自ら夏の近きを知る。三一 是くの如く爾等亦此等  
の事の成るを見ん時は、神の國の近きを知れ。三二 我誠に爾等に語  
ぐ、此の世未だ逝かずして、此れ皆成るを得ん。三三 天地は廢せん、然  
れども我が言は廢せざらん。三四 自ら慎め、恐らくは爾等の心  
は鬻鬻、沈湎、及び度生の慮に鈍くせられて、彼の日突然爾等  
に至らん。三五 蓋斯の日は網の如く、一切全地の面に住む者に臨ま  
ん。三六 故に恒に儆醒して祈れ、此等來らんとする事を悉く遁れて、  
人の子の前に立つに堪へん爲なり。三七 イイスス晝は殿に在りて教  
を宣べ、夜は出でて、橄欖山と名づくる山に宿れり。民皆朝早く殿に來  
り、彼に就きて聽けり。

第二十二章 一 除酵節即逾越と名づくる節は近づけり。二 司祭諸

長と學士等とは如何にイイススを殺さんと謀れり、蓋民を畏れた  
り。三時にサタナは十二の一なるイウダ、稱して「イスカリオト」  
と云ふ者に入れり。四 彼往きて、司祭諸長及び庶司と共に、如何に  
イイススを彼等に付さんことを語れり。五 彼等喜びて、銀を彼に與  
へんことを約したれば、六 彼諾ひて、民の在らざる時にイイススを  
彼等に付さん爲に、好き機を窺へり。七 除酵日即逾越節の羔を宰  
るべき日至れり。ハイイススはペトル及びイオアンを遣して曰へり、  
往きて、我等が食せん爲に逾越節筵を備へよ。九 彼等曰へり、何處  
に之を備へんことを欲するか。一〇 彼は之に謂へり、視よ、爾等が城  
に入る時、水を盛れる瓶を攜ふる人爾等に遇はん、之に隨ひて、  
其入る所の家に入りて、一家の主に語げよ、師爾に謂ふ、我が  
門徒と偕に逾越節筵を食すべき室は何處に在るか。一二 彼爾等に  
敷き飾りたる大なる樓を示さん、彼處に備へよ。一三 彼等往きて、  
其言ひし若き事に遇ひて、逾越節筵を備へたり。一四 時至りて、イイ  
スス席坐し、十二使徒彼と偕にせり。一五 彼等に謂へり、我苦を受  
くる先に、此の逾越節筵を爾等と偕に食せんことを甚望めり。一  
六 蓋我爾等に語ぐ、我復た之を食せずして、其神の國に成るに至ら  
ん。一七 乃 爵を執りて、感謝して曰へり、此を取りて、互に分て。  
一八 蓋我爾等に語ぐ、我復葡萄酒の實より飲まずして、神の國の臨む  
に至らん。一九 又餅を取り、感謝して之を擘き、彼等に與へて曰へり、

これわれ、爾等の爲に付さるる者なり、爾等此を行ひて、我を記念せよ。二〇同じく晚餐の後に爵を執りて曰へり、此の爵は新約、爾等の爲に流さるる我が血を以て立つる者なり。二一視よ、我を賣る者の手は我と偕に席上に在り。二二人の子は逝く、預め定められしが如し、惟彼を賣る者は禍なる哉。二三彼等互に誰か此を爲さんとするを問へり。二四又彼等の中に、孰か大なると互に争ふことあり。二五彼は之に謂へり、諸王は其諸民を主り、民の上に權を執る者は恩主と稱へらる。二六然れども爾等は斯くある可からず、乃爾等の中に大なる者は、小き者の如く、首たる者は、役はるる者の如くなるべし。二七蓋孰か大なる、席坐する者か、役はるる者か、席坐する者に非ずや、然れども我は爾等の中に在りて役はるる者の如し。二八爾等我が患難の中に於て恒に我と偕にせり、二九我も亦爾等に國を遺し予ふ、我が父の我に遺し予へしが如し、三〇爾等我が國に於て、我が席に食飲し、且位に坐して、イスライリの十二支派を審判せん爲なり。三一主又曰へり、シモンよ、シモンよ、視よ、サタナ爾等を麥の如く簸はんことを求めたり。三二然れども我爾の爲に、爾の信の盡きざらんことを禱れり、而して爾後に轉じて、爾の兄弟を堅めよ。三三對へて曰へり、主よ、我爾と偕に獄にも死にも往かんことを備へたり。三四彼曰へり、ペトル我爾に語ぐ、今日鶏の鳴かざる先に、爾三次我を諱みて、識らずと言はん。

三五又彼等に謂へり、我が爾等を金囊も、行袋も、屨もなくして遣し、時、爾等缺けたることありしか。曰く、無かりき。三六彼曰へり、然れども今は金囊ある者は、之を取れ、行袋も亦然り、劍なき者は、衣を賣りて之を買へ。三七蓋我爾等に語ぐ、録して、罪犯者と偕に算へられたりと云へることも、我に於て應ふべし、蓋我を指して録されし事は終あり。三八彼等曰へり、主よ、視よ、此に二の劍あり。彼曰へり、足れり。三九乃出でて、例の如く、橄欖山に往けり、其門徒も彼に従へり。四〇其處に至りて、彼等に謂へり、祈禱して誘惑に入るを免れよ。四一自ら石の投げらるる程に彼等を離れ、膝を屈めて、禱りて四二曰へり、父よ、噫若し爾此の爵をして我を過ぎしめんことを肯じたらんには。然れども我の旨成らずして、爾の旨成るべし。四三天使は天より現れて、彼を堅めたり。四四彼痛く哀みて、禱ること愈切なり、其汗は血の滴の如く地に下れり。四五祈禱より起きて、門徒に來り、其憂に依りて寝ぬるを見て、四六彼等に謂へり、何ぞ寝ぬる、起きて祈禱せよ、誘惑に入らざらん爲なり。四七彼が尚言ふ時、見よ、民至り、十二の一、イウダと名づくる者、之に先だちて行き、イイススに就きて接吻せり。蓋此の號を彼等に與へたり、我が接吻せん者は、卽斯の人なりと。四八イイスス之に謂へり、イウダよ、爾接吻を以て人の子を付すか。四九彼と偕に在りし者、事の及ぼんとするを見て、彼に謂へり、主よ、

われらつぎを以て撃たんか。五〇 其中の一人は司祭長の僕を撃ちて、其右の耳を削げり。五一 イイス答へて曰へり、此に之に至りて止めよ、乃其耳に捫りて、之を醫せり。五二 イイスは己に向ひ來れる司祭諸長と殿の庶司と長老等とに謂へり、爾等は盜賊に向ふ如く、劍と棒とを持ちて、我を捕らへん爲に出でたり。五三 我日日爾等と偕に殿に在りしに、爾等我に手を措かざりき、然れども今は爾等の時及び黑暗の勢なり。五四 既に彼を執へて、曳きて司祭長の家に至れり。ペトル遠く隨へり。五五 人人が中庭の内に火を燃きて、共に坐せし時、ペトルも其中に坐したり。五六 一人の婢彼が火に向ひて坐せるを見、之に目を注ぎて曰へり、此の人も彼と偕にありき。五七 然れども彼諱みて曰へり、女よ、我彼を識らず。五八 少頃ありて、他の者彼を見て曰へり、爾も彼等の一人なり。ペトル曰へり、人よ、然らず。五九 約一時を過ぎて、又一人言を力めて曰へり、實に此の人も彼と偕にありき、蓋是れガリレヤの人なり。六〇 然れどもペトル曰へり、人よ、我爾が言ふ所を識らず。尚之を言ふ時、忽 鶏鳴けり。六一 主身を轉じて、ペトルに目を注ぎたれば、ペトル主の彼に、鶏の鳴かざる先に、爾三次我を諱まんと、云ひし言を憶ひ起して、六二 外に出でて、痛く哭けり。六三 イイスを執れる者戯れて、彼を扑り。六四 其目を蔽ひて、其面を批ち、問ひて曰へり、預言せよ、爾を撃ちし者は誰ぞ。六五 其他多くの事を謂ひて、彼を誂れり。六六 平旦

に及びて、民の長老等と司祭諸長と學士等と集りて、彼を其公會に曳きて六七 曰へり、爾はハリストスなるか、我等に告げよ。彼曰へり、我若し爾等に告げば、爾等信ぜざらん、六八 若し爾等に問はゞ、爾等應へざらん、又我を釋さざらん。六九 今より後人の子は神の大能の右に坐せん。七〇 僉曰へり、然らば爾は神の子なるか。彼答へて曰へり、爾等言ふ、我は是なり。七一 彼等曰へり、何ぞ復證を求めん、蓋我等自ら其口より聞けり。

第二十三章 一 衆皆起ちて、彼をピラトの前に曳き、二 彼を訴へて曰へり、我等は此の人が我が民を惑はし、税をケサリに納むるを禁じ、自らハリストス王と稱ふるを見たり。三 ピラト彼に問ひて曰へり、爾はイウデヤ人の王なるか。彼答へて曰へり、爾言ふ。四 ピラト司祭諸長及び民に謂へり、我此の人に一も罪あるを見ず。五 然れども彼等益奮ひて曰へり、彼民を亂し、全イウデヤに教へて、ガリレヤより始め、此の處に至れり。六 ピラトはガリレヤと聞きて、此の人はガリレヤ人なるかと問ひ、七 既にして其イロドの權下に屬するを知りて、彼を當時同じくイエルサリムに在りしイロドに遣せり。八 イロド イイススを見て、甚喜べり、蓋久しく彼を見んと欲せり、彼の事を多く聞き、且彼に由りて行はるる休徴を見ん事を望みたればなり。九 故に多くの言を以て彼に問ひたれども、彼は何を答へざ

りき。一〇 司祭諸長と學士等と立ちて、彼を訴ふること甚切なり。  
二 然れどもイロドは其士卒と共に、彼を侮り、且嘲弄して、彼に  
鮮なる衣を衣せて、復彼をピラトに遣せり。二 是の日に於て、  
ピラト及びイロド互に親しくなれり、蓋先には相讎たりき。一三 ピ  
ラトは司祭諸長、有司等、及び民を呼び集めて、一四 彼等に謂へり、  
爾等は此の人を以て、民を惑はす者と爲して、我に曳き至れり、視  
よ、我爾等が訴ふる所を以て爾等の前に審べて、此の人に一も罪  
あるを見ざりき。一五 イロドも亦然り、蓋我之を彼に遣したれども、  
其中に一も死に當たる事を得ざりき。一六 故に我答うちて、之を釋  
さん。一七 蓋節期の爲に一の 囚を彼等に釋すべき事ありき。一八 然  
れども民皆號びて曰へり、此を去れ、ワラウワを我等に釋せ。一九 此  
の人は城の中に亂を作し、人を殺し、に因りて、獄に下されたり。  
二〇 ピラトはイイススを釋さんと欲して、復聲を揚げたれども、二一  
彼等呼びて曰へり、彼を十字架に釘せよ、十字架に釘せよ。二二 ピラ  
ト第三次曰へり、彼は何の悪を行ひしか、我一も其中に死に當たる事  
と見ざりき、故に答うちて彼を釋さん。二三 然れども彼等 益聲を厲  
まして、彼を十字架に釘せんことを求めたりしが、彼等と司祭諸長  
との聲は勝てり。二四 ピラト遂に其求めの如く擬めて、二五 亂と殺人  
との爲に獄に下されたる人、彼等が求めし者を釋し、イイススを付  
して、彼等の意旨に任せたり。二六 彼を曳く往く時、或キリネヤの人

シモンが田より來り過ぐるを執へ、之に十字架を負はせて、イイスス  
に從はしめたり。二七 衆くの民は彼に隨ひ、又多くの婦ありて、彼  
の爲に哭き哀めり。二八 イイスス彼等を顧みて曰へり、イエエルサリ  
ムの女よ、我の爲に哭く勿れ、己及び爾等の子の爲に哭け。二九  
蓋視よ、日至りて、人人曰はん、妊まざる者、未だ産まざる胎、未  
だ哺はせざる乳は福なりと。三〇 其時人人山に對ひて、我等の上に  
倒れよ、陵に對ひて、我等を掩へと曰はん。三一 蓋若し青き木に斯  
く爲さば、枯木は如何にせられん。三二 イイススと偕に亦二人の犯  
罪者を死に處せん爲に曳けり。三三 髑髏と名づくる處に來りて、  
彼處に彼及び二の犯罪者を十字架に釘せり、一は其右、一は左な  
り。三四 イイスス曰へり、父よ、彼等を赦せ、蓋彼等は爲す所を知  
らず。人鬮を取りて、其衣を分てり。三五 民立ちて見たり、有司等  
も衆と與に嘲りて曰へり、彼は他人を救へり、若し彼ハリストス、神  
の選びたる者ならば、己を救ふべし。三六 兵卒も亦彼に戯れ、近づ  
きて、醋を與へて三七 曰へり、爾若しイウデヤ人の王ならば、己を救  
へ。三八 彼の上にエルリン、ロマ、エウレイの文字を以て書したる標  
あり、曰く、是れイウデヤ人の王なりと。三九 懸けられたる犯罪者の  
一人彼を誦りて曰へり、爾若しハリストスならば、己と我等とを救  
へ。四〇 他の一人之を戒めて曰へり、爾豈神を畏れざるか、蓋爾  
も同じく定罪せられてあり、四一 惟我等に在りては當然なり、我が

行に稱へる事を受くればなり、然れども彼は一も不善を行はざりき。四二 乃 イイソスに對ひて曰へり、主よ、爾の國に來らん時、我を記念せよ。四三 イイソス彼に謂へり、我誠に爾に語ぐ、爾今日我と偕に樂園に在らん。四四 時約六時なり、晦冥は全地を蔽ひて第九時に至れり。四五 日は晦み、殿の幔は中より裂けたり。四六 イイソス大聲に呼びて曰へり、父よ、我が神を爾の手に託す。之を言ひて、氣絶えたり。四七 百夫長成りし事を見て、神を讚榮して曰へり、此の人は誠に義人なり。四八 之を觀ん爲に、聚りたる衆民は、成りし事を見て、膺を拵ちて返れり。四九 彼の相識及びガリレヤより彼に従ひし婦等、皆遠く立ちて、此等の事を見たり。五〇 時にイオシフと名づくる人、義士にして、善且義なる者、五一 彼等の謀と所爲とに黨せず、イウデヤの邑アリマフエヤに屬し、自らも神の國を俟てる者は、五二 ピラトに就きて、イイソスの屍を求めたり。五三 既に之を下して、布に裏み、磐に鑿ちたる、未だ人の葬られざる墓に置きたり。五四 是の日は備節日にして、安息日己に遡つけり。五五 ガリレヤよりイイソスと偕に來りし婦等後に隨ひて、墓及び如何に彼の屍を置きたるを觀たり。五六 歸りて後、香料と香膏とを備へ、誠に遵ひて安息日を息みたり。

第二十四章 一 七日の首の日、朝甚早く、彼等は備へたる香料を

攜へて、墓に來り、他の婦も彼等と偕にせり。二 石の墓より移されたるを見、三 入りて、主イイソスの屍を見ざりき。四 之が爲に惑へる時、觀よ、輝ける衣を衣たる二人彼等の前に立てり。五 彼等懼れて、面を地に伏せられたれば、二人之に謂へり、何ぞ生ける者を死者の中に尋ぬる。六 彼は此に在らず、乃復活せり、彼が尚ガリレヤに在りし時、如何に爾等に語げて、七 人の子が罪人の手に付され、十字架に釘せられ、第三日に復活すべき事を謂ひしを憶へ。八 彼等其言を憶ひ起し、九 墓より歸りて、悉く此を十一 門徒及び其餘の者に告げたり。一〇 使徒に此を告げたる者は、「マグダリナ」マリヤ、イオアンナ、イアコフの母マリヤ、及び其他彼等と偕に在りし者なり。一一 使徒は彼等の言を空言と爲して、之を信ぜざりき。一二 然れどもペトル起ちて、墓に趨り行き、俯して、唯裏布の置けるを見、其成りし事を心に異みて歸れり。一三 是の日其中に二人、イエルサリムを去ること約六十里なるエムマウスと名づくる村に往きしが、一四 互に凡そ彼等の有りし事を語れり。一五 語り且論ずる時、イイソス親ら近づきて、彼等と偕に行けり。一六 然れども二人の目は捉へられて、彼を識らざるを致せり。一七 彼曰へり、爾等は行きて何事をか互に論じ、又何ぞ憂ふる色ある。一八 其一人、クレオパと名づくる者、彼に對へて曰へり、イエルサリムに來りし者の中、爾獨近日其中に成りし事を知らざるか。一九 問ひて曰へり、何の事ぞ。彼等曰

へり、イイススナゾレイ、卽神及び衆民の前行と言とに能力ある預言者たりし者に在りし事、二〇如何に我等の司祭諸長及び有司等が彼を解して、死に定め、十字架に釘せし事なり。二一我等嘗て此の人はイズライリを贖ふ者なりと望めり、然れども此れ皆成りしより今已に第三日なり。二三然るに又我等の中の或婦等は我等を驚かせり、彼等朝早く墓に在りしが、二三其屍を見ずして、來りて、天使等の現れて、彼は生くと言ふを見しことを語げたり。二四我等の中の數人は墓に適きしに、果して、婦の言ひし如き事を見たり、惟彼を見ざりき。二五 イイスス彼等に謂へり、噫無知にして、凡そ諸預言者の言ひし事を信するに心の遅き者よ、二六 ハリストスは此くの如く苦を受けて、其光榮に入るべかりしに非ずや。二七是に於てモイセイより始めて、諸預言者に及ぶまで、凡そ聖書に彼を指して載することを彼等に説き明せり。二八 往く所の村に近づきしに、彼は尚遠くに行かんとする者の若し。二九 二人彼を留めて曰へり、我等と偕に止れ、蓋時暮れんとし、日已に戻り。彼入りて、偕に止れり。三〇 席坐せる時、彼餅を取りて、祝福し、擘きて彼等に與へたり。三一 其時二人目啓けて、彼を識れり、而して彼忽に見えずなりき。三二 彼等互に言へり、途中彼が我等と語り、且我等に聖書を解き明し、時、我等の心我が衷に燃えしに非ずや。三三 即時に起ちて、イエルサリムに歸り、十一門徒及び之と偕に聚れる者に遇へり。

三四 僉言ふ、主は實に復活せり、而してシモンに現れたり。三五 二人も亦途中に在りし事、及び如何に其餅を擘く時彼等に識られし事を述べたり。三六 此等の事を語れる時、イイスス親ら彼等の中に立ちて曰へり、爾等に平安。三七 彼等驚き且懼れて、見る所は神なりと意へり。三八 イイスス彼等に謂へり、何ぞ懼れ惑ふ、胡爲れぞ此の意は爾等の心に起れる。三九 我が手我が足を視よ、是我自なり、我に捫りて視よ、蓋神には骨肉なし、其我に有るを見るが如し。四〇 此を言ひて、手足を彼等に示せり。四一 彼等喜に因りて、猶未だ信ぜず、且異める時、彼曰へり、此に食ふべき物あるか。四二 彼等は炙りたる魚一片と蜜房とを彼に與へたれば、四三 取りて、彼等の前に食へり。四四 又彼等に謂へり、我猶爾等と偕に在りし時、爾等に語りて、モイセイの律法、諸預言者、及び聖詠に、我を指して録されし事、皆應ふべしと云ひしは、乃是なり。四五 其時彼等の智識を啓きて、聖書を悟らしめたり。四六 又彼等に謂へり、斯く録されたり、而して斯くハリストスは苦を受け、第三日に死より復活すべかりき。四七 且其名に因りて、悔改と諸罪の赦とは、イエルサリムより始めて、萬民に傳へらるべきなり。四八 爾等は此等の事の證者なり。四九 視よ、我は我が父の許約せし者を爾等に遣さん、爾等イエルサリムの城に居りて、上より能力を衣するに迄れ。五〇 イイスス彼等を外に率ゐて、ワイファニヤに至り、手を擧げて彼等に祝福せり。五一

祝福しゆくわくする時とき、彼等かれらを離はなれ、擧あげられて、天てんに升のぼれり。五二五二 彼等かれら之これを拜はいし、大おほいに喜よろこびて、イエルサリムいゑるさるいむに歸かへり、五三五三 恒つねに殿でんに在ありて、神かみを頌美しょうび祝讚しゆくさんせり、「アミン」。